
ふぁんたじい

桜アサノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふぁんたじい

【Nコード】

N1095R

【作者名】

桜アサノ

【あらすじ】

ある日突然、私の部屋に、妙にイケメンな生き物が現れた。彼は自分を魔界から来た魔王候補だと名乗り、ちゃっかり居座ってしまったのだった。

ちよっと！　ここは私の部屋なんだけど！

とりあえず出会いから

「ちょっと！ 何、人んちでバリバリ食ってる訳！」

目の前の光景の異様さとかは、二の次だった。

私の！

愛しのポテトチップスがっ！

「私は、木崎成則と申す者」

色々あった後（そりゃあ、ポテチの袋からこの妙な物体を引き剥がし、きつちり落とし前、じゃなかった、事情説明等聞かなくては先に進まない……故に、大人の反応をした）、渋々、相手は口を開いた。

「あ、そう……木崎、さん、じゃなくて！」

「何ぞ、問題でもあるのか？ この名に」

「そうじゃなくて、そもそも」

木崎さん、何者？

木崎と名乗った相手は、端正な顔立ちをしていた。色白の肌に、柳眉。形のよい目。

頭に被った妙な形の帽子（やたらとんがった妙なあれを帽子と呼んでいいかわからないが、それ以外の語彙が私にない）の下に見え隠れしている、如何にも柔らかかそうな茶の髪。

ごく普通に道ですれ違ったりしたら、あら綺麗な……という感想を持つだろう。

まあ奇異に見える服装は、考えないものとして。問題は。

何故私の部屋に彼がいるのか、ということであり、そしてもっと問題なのは。

彼がどう見ても、掌サイズ……ちっさい、ということである。

「私は、魔王候補である」

まるで、自分は学生ですとか、会社員ですとか。そういうノリであつさり、魔王（候補）とか言われても。

「は？」

「何ぞ、その間抜け面は」

それ以外の反応など、どうして出来ようか。

「魔王って……あの魔王ですかね」

「此方には、あの魔王だとか、この魔王だとか、いるのか？」
逆に聞かれてしまった。

「いや、魔王は魔王ですね……私の知る限り」

「ならば問題はないな」

うつかり流されて頷くところだった。

「いや！ 大有りだろ」

（2011/2/22）

説明してもらわないとわからない（前書き）

部屋でポテトチップスをばりばり食い散らかしていた相手は、自分を魔王候補だと名乗った。

説明してもらわないとわからない

魔王（候補）を名乗る木崎さんによると。

彼らのいる魔界とかいうところを、束ねる頂点が、魔王と呼ばれる存在で。

その候補となるのは、魔界でもかなり高位の魔力を持ち、自ら治める所領を持つような、大きな家の出の者に限られるらしい。

「へえ……木崎さんエリート階級」

そういうと、酷く嫌そうな顔をした。

坊っちゃんの気に障ることだったらしい。

「……私が選ばれたのは、私のこれまでの努力の賜物、家等関係ない」

嗚呼、成る程。

只の甘やかされたボンボンって訳じゃない、と。もしかして、自分のおうちとうまく行っていないのかな？ という考えが頭を掠めたけど、ぐっと飲み込んだ。

初対面ですみずか踏み込むことでもないし。

でもって、候補に選ばれた彼は、自分の資質を魔界に示し、自分が魔王の器たることを証明しなくてはならない。

「具体的に何やるの？」

興味をひかれ、聞いた。

「魔界から他へ行くときには、道が開く」

彼は言った。

「何処に開くかは、通ってみねばわからぬ」

「不便だな」

「行く先を分かった上で道を開けるのは魔王のみ」

一応それにも理由はあるらしい。やたらに他の世界に干渉せず、また、魔界にもむやみによそ者を入れない為。

魔物にも、守るルールがあるというのが、可笑しいような、ほっとするような。

「それで、開いた先が此処であつた」

「私の部屋かい……、で？」

「む？」

「だから、具体的に何をするわけ？」

ああその事が、と彼は頷いた。

「一番に出会つた相手を、如何に早く虜にするか、が試験ぞ」

言葉の意味が、よくわからなくて反芻する。

「とりこ……？」

「魔界を統べる存在たるもの、魔の魅力を最大限に発揮できねばならぬ、無作為に選ばれた相手を魔物の虜として、初めて、私もその地位を認められる」

非常に、嫌な予感がした。

「一応、確認したいんだけど」

「何ぞ」

「一番に会つた相手って……まさか、私じゃないよね？」

「何を寝惚けたことを」

彼は呆れたように首を振った。

「決まっているだろう、なればこそ、私の素性も話したのであろうが……そなたの資質如何では、特例ではあるが、妃の一人として迎えてやつてもよいぞ」

彼の最後の言葉と。

「ざけんなっ」

私のぐーパンチが炸裂したのは、ほぼ同時、だった。

(2011/2/22)

説明してもらわないとわからない（後書き）

見目形がよくても、中味はどうなんだろうね？

新生活には準備が必要です

隣を歩く木崎さんは、濃い茶のハーフコート姿。

ダークな色合いのジーンズに、襟のかっちりしたシャツ。そして、落ち着いたモスグリーンの、暖かそうなベスト。

彼の歩みに合わせて、髪が白い頬を撫でている。

少しだけ目線の高い彼を、不思議な気持ちで見上げた。

なんでも、普段小さいのは、魔力を抑える為なんだとか。

外に出るというので、そのナリ——勿論身長もあるけれど、何せ本人は魔界の装束だと主張する、細長いとんがった変な帽子だとか、やたらごわついた、まるで海老の尻尾がつながったような袖だとか、コスプレか何かか？ と聞きたくなるような姿なので——でどうやって！ と止めた私に、ふっと笑って彼は。

するりと、自分の大きさを変えた。

男性（……多分男性なんだろうなあ）としてはそんなに高い方じゃないかも。華奢な感じ。

とはいえ、頭一つ分くらいは、私よりも高い。

そして涼しい顔で此方を見下ろして。

「それでも、無理と思うか？」

そう、言った。

「で、外出て何するの？」

「まずは、情報収集だな、基本だろう」

「はあ……」

つまりは、街中を歩いてみたい、と。

そんな訳で、ばたばたしたけれど着替えを購入（私のお金だっ！

後で魔界に請求してやる）して、普通の人に見えるようになったところで、外出開始。

魔物のいる魔界だからといって、何でもかんでも、他の世界（今のところ今いる世界と魔界の二つの存在しか、私にはわからない訳だが、彼が言うには他にもあるらしい）を侵す訳ではないらしい。

基本的には、互いの領分を守り、その領内を治めるのが、長の仕事。「じゃあなんで、よその世界に来るのが試験なの？」

そう問うと、彼は呆れたように溜息をついた。

「己を知るには外を知る事が必要というもの」

そんな事も知らんのか、と如何にも無知だなと言う薄い笑いに、ちよつとむつとする。

「外も何も、普通の人は、自分の世界以外知らないと思う」

「選ばれし者はそうはいかぬ」

「ふーん」

それはそれは。

大変な事で。

「じゃあ何も、私が君に惚れる必要なんて全くないじゃん」

「そうはいかぬ」

惚れるっていうのとはちよつと違うのだが。

魅了する？

心酔させる？

まあ、そんなような意味で使っているらしい。虜、という言葉。

彼自身には、其処に全く感情がこもっていない。普通は相手に魅入られるって事は重たいものだと思うのだが、そういった経験がないのかなんのか。

彼が口になると、「惚れる」もまるで記号のように思える。

「私に骨抜きになってもらわぬとな」

「うつわー、ありえねー」

こんな尊大で訳わからん相手に。

……そりゃあ、顔はかなりいい線行っているけれど。

くしゅつ。

風が強くなってきた。思わずくしゃみをする、体が自然に反応して、ぶるつと震える。

「寒いのか？」

不思議そうに彼が聞いた。

「だって冷え込んできたもの」

マフラーおいてきたのは失策だったな。手袋のない手をこすり合わせるようにして、コートの袖の内側へと入れる。

「ふん……人間とはずいぶんもろいものぞ」

何処か感心したような、でも馬鹿にしているような。

そんな声音と一緒にふわりと何か柔らかいものが降ってきた。

「ぶっ！？ な、これ？」

「私には必要ない」

さっき買った、ストライプ模様のカラフルなマフラー。

一応男物だけど、かなり派手な色合いで、ぐふりとか思いながら彼に当てさせたら、美形ってのは得なもので、そんなものでもすごく似合ってしまった、という、私にとっては、いわくつきの代物。

「で、でも」

「そなたがすればよい」

ぐるぐると、色気も何もない感じで巻かれたそれは、でも。

……ほんのりと、暖かい。

(2011/2/22)

新生活には準備が必要です（後書き）

思ったよりも馴染んでる。

生活するって物入りだよな（前書き）

そうして、何故か行動を共にしている二人。

生活するって物入りだよな

「じゃあ、行ってきます」

「うむ」

何時の間にか、そんな挨拶が定着するくらい。

あれ？

なんで同居してるんだろう……

自称魔王（候補）の木崎さんとの奇妙な暮らしも数日。

そういえば、しょっぱなから異常事態ばかり続いた所為で、なんで彼の身の回りの世話をしているんだとか、そもそもなんで此処に彼が住み着いているのとか、そういう疑問を全く忘れていた。

私はこれでも、社会人、である……一応。朝は働きに出て、夜帰ってくる暮らし。残業がないので、割ときっちり同じ時間に帰ってくるのが、この場合いいんだか悪いんだか。

「そういえばさあ」

「む？」

晩ご飯のフライドチキンとコールスローサラダ、飲み物はコップ出すのも面倒なのでペットボトルのまま。ペットボトルを持つ都合上、彼にも体の大きさを変えてもらって、差し向かい、同じ目線である。

料理はしないのか？

そりゃあ、しない訳ではない。このご時世、外食続きなんて優雅な事は言っていられない。つまり今日は、時間がなかったただけだ。

というのも、木崎さんは割と大食漢というか、量を食べる。しかもおなががすくと不機嫌になって、面倒な事になりやすいのだ。

だから今日のこれは、手抜きではなく、互いの精神安定の為、である。

そんな食卓を前に、ようやく思いついた疑問を、口にした。

「なんで住み着いてんの？」

「誑し込む対象の傍にいて何が悪い」

「はいはいはい、だから感情のこもらない声でそういう発言しない」
本当に意味わかってんのか？ と突っ込みたくなるから。

「魔王さんって、色々規制はあるみたいだけど、結構色々できるんですよ？」

「まあな」

「じゃあ、何もこんな部屋で間借りしなくても、その力で家一軒出すとかさ、なんかないの？」

「ない」

「即答かよ!!」

「私が言った事を聞いておらぬのか」

木崎さんが涼しい顔で、フライドチキンを取り上げると、がぶりと形のいい歯で噛み千切る。あつという間に食べてしまうと、紙ナプキンで指先の油を綺麗に拭い、ペットボトルへと手を伸ばした。

ラッパ飲みだというのに、なんとという優雅な仕草だか。流石坊ちゃん育ち。

溜息が出てきそうだ。

「言った事って何？」

このままだと彼が食事に没頭しそうなので、話題に引き戻そうと、私は質問する。

木崎さんは煩わしそうに、取り上げていたフライドチキンを自分の前の皿において、口を開いた。そんなに食べたいのか。

「他の世界に干渉はできぬ、よほど事情がある場合でなければな」

「いやあ……試験って事情じゃないの？」

「降りかかる物事を如何に乗り切るかも、要素の一つぞ」

「……」

言葉は悪いですが。

この場合、ヒモとまでは言わなくても、居候？ という手段で彼は乗り切ろうとしている、と。

「すごいなあ……天然でそれか」

「何ぞ？」

この人、そういう、男女の事だとか、コイバナとか、絶対疎いに違いない。それでなきや、天性たらしなのか。

わざとそう見せてるんだとしたら、これ以上の役者はないわ。

「問題でもあるのか？」

「問題と言うか……普通此処では、未婚女性の家に、男性が転がり込んで、っていうのはあまり好ましくないかな、等と」

心情はどうあれ、傍から見たら同棲扱いになる、これ。

「そなたが私がものとなるのも、時間の問題」

「だーかーらー！！ そういう台詞をそういう顔で言うなっ」
うっかり赤面する。

断じて嬉しいとかじゃない。

恥ずかしすぎて身悶えしたくなる。

その辺に頭打ちつけないくなる。

「ならば、一定の金子を入れれば問題ないという事か？」

「なんか古風な言い回しだな」

それに、別に部屋代出せとかそういう話じゃなかったんだけど、流れがそんな風になって。

「近日中に準備しよう」

「は？」

準備って。魔界の通貨が此処で通用するのかとか、大体どうやって準備する気なんだとか。色々頭の中を巡らせていると。

「私が先ほど言った事を聞いておらぬのか、此処では魔界の力は使わぬ」

ほとほと呆れ果てた、という声がした。

「じゃあどうやって……」

「仕事という手段があるであろう、正社員となるには難しくとも、バイトならば私でも何とかできよう」

そりゃあ、身元をどうするとかあるもんね……ってそっちの問題じゃなくて！

「木崎さんが、バイト!？」

素っ頓狂な声で叫んだから、ひどく迷惑そうに、両耳をふさいで睨まれた。

(2011/2/22)

軌道に乗るまでが勝負です（前書き）

意外と適応力がある？　なんてちょっと見直してなんかいないけれど。

軌道に乗るまでが勝負です

木崎さんと暮らし始めて、月単位で数えられるようになった。

驚く事に、本当に彼はバイトを見つけてきて、お仕事をしている。さらに驚く事に、仕事先での評価は悪くないらしい。

「一体、何の仕事してるの？」

「その時によつて様々」

そう言つて、何の仕事をしているのか、どの辺なのかすらも、教えてはくれないのだけど。

あれか。私が仕事先に押しかけて、見物するとか、そう考えているのか。

そう思っていたから。

朝出かける時に、今日仕事を終えたら此処で待て、と簡素な略図を手渡された時は、一体何が起こるのかと思った。

指定場所は地下鉄の入口の一つである。

風が当たらないように、階段を少し降りたところで立っていると。

「結城」

名前を呼ぶ声に、はつと振り返り、そして気が付いた。

二人称が、『そなた』か『貴様』の木崎さんが、それ以外に私を示す固有名詞を——名字とはいえ——呼ぶのが初めてだ、という事を。

久しぶりに一緒に歩いている。

頭一つ分とまではいかないけど、少しだけ高い背。

その横顔を見ながら、この間彼と話した事を思い出していた。

「クリスマス、だと」

先日の事だった。テレビから流れる言葉に、首を傾げる彼に、魔界にはそういう行事がないのか尋ねたところ。

「あると思うか？」

あつさり聞き返された。

考えてみたら、魔界つてところに、神がどうこう、天使がどうこう、なんて関係あるとは思えないですね……なんとなくイメージだけど。

「で、クリスマスとは何だ」

「うんとですねえ、サンタクロースがプレゼントくれる日です」

間違った事は言っていないのだが、かなり省略された説明に、木崎さんは眉を顰めた。

「簡素すぎるのではないか」

「そうかなー、一番大事なところを押さえたんだけど」

「フン」

あれ？

「……つて事は、木崎さんクリスマス知ってるんじゃないの？」

「神の子だかなんか生まれた日であろう？」

わかってるんじゃない。

「じゃあなんで聞くの」

「そなたらの言うクリスマスとやらの扱いが、少々違うように思えた」

結構鋭いかもしれせんね。それ。

「うんそうだねー、それにかこつけてごちそう食べたりして、家族や大事な人と過ごす日かも」

「ふむ」

少し考え込んでいた彼。その時は、どうしたのと聞いても、なんでもない、さっさと食事にしろって怒られたんだっただけ。

「木崎さん何処まで行くの？」

「もう少し先だな」

街は、クリスマスから新年にかけて特有の、浮足立った華やかさを

持っている。しんと冷えた空気に、イルミネーションが煌めく。歩いているだけで、うきつきとしてくるのだから、不思議なものだ。空の星は、宝石に喩えられるけれど、地上の星も、なかなかどうして、負けてはいない。

「綺麗だねえ」

思わず呟くと、隣で、フンという、返事ともつかぬ返事があった。

「此处だ」

彼が立ち止ったのは、川べりの遊歩道。きつと昼間ならば、犬の散歩などで人が歩いているんだろうけれど、暗くなった今は、殆ど^{ひとけ}人氣がない。

一人で来たら、流石に怖いな。

「何があるの？」

「あちらだ」

指差す方向に。

「……あ」

少し遠めだけど、聳え立つ光の塔。

その高さでよく話題になっている、建設中のタワーが、見えていた。

「綺麗……」

青みがかった、小さな光。

それは、さっきまでの街並みに比べたら、色とりどりという訳にはいかないけれど。近くに、他に高いものが見当たらないので、すっきりとタワーの灯りが見える。

仰々しくはない。だけど、地味でもない。

……好ましい、と思った。

暫く二人とも黙って、塔を見つめていた。

「でもどうして？」

帰り道。あれきり、何も言わない木崎さんを見上げて、初めて私は口を開いた。

「……先日、たまたまあそこを通って、あの光景を見た」

夜に帰ってきていた事もあるので、そういう日もあったんだろう。

木崎さんの仕事場って、この近くなんだろうか。

「……見せたいと、そう思った」

「へ？」

誰に？

そういう視線を向けていたのだろう。

「な……！ 何でもない！ それ以上聞くな」

「だって気になる」

「ええい、黙って歩け！」

やがて、ぽつりと、歩きながら彼は言った。

「我ながら、わからぬ……何故そのように思ったのか……」

「綺麗だなんて思ったんだよ」

「何？」

此方を見る彼の顔は、なんだか、戸惑ったような色の瞳。そんな表情をしていると、子供のようにも見えて、不思議と、自分の声が柔らくなかった。

「綺麗だなんて思って、誰かと見たいな、そういう感情を共有したくなって、そう思ったんじゃないかな……」

「……フン」

くだらぬ、というその声は。少しだけ元気がなくて。

「木崎さん？」

彼は、頭を振った。

「何でもないわ」

(2011/2/23)

一度ある事は二度あるものです(上)(前書き)

クリスマスが終われば、来るのはそう、正月。

一度ある事は二度あるものです(上)

「なるほど、これが正月というものぞ……」

「そこ！ 餅いくつ目だよ」

「細かい事を気にするでないわ」

「そうだそうだ、ちっちゃえ事言つてると、早くふけるぜ」

「ってか、増えた居候！ でかい口きくな!!」

増えた居候？

それは、大晦日の夜の事。

部屋の隅から、なんか音がする事に気が付いた。最初は、風でも出てきて、外で音がしているのかと思っていたのだけど、よくよく聞いていると、かりかりって、誰かがひつかいているような感じにも聞こえるそれ。

「き、木崎さん……」

「何ぞ」

顔色が悪い、と彼が振り返る。

「なんか、音してるよね？」

「ああ、あれか」

「あれかって、そんなあつさり流さないで下さいよ」

ベランダでなんか引つかかって、あんな音がする、とかいう落ちないけれど、動物とか、まさか人がいるとかね。ドキドキするじゃないの。

そりゃあ此処には、魔王（候補）と名乗るものがいて、そう考えたら、この上なく強いボディガードがいるような感じもするけど、どつかずれてるこの相手が、本当に頼りになるのかどうか……そう思うと、どんどん不安が募る。

「それよりも、年越し蕎麦とやらは、まだか？」

「食べる事だけかよ」

言いながらも、このままじゃ伸びてしまうので、茹で上がった蕎麦を冷水で引き締めて。

薬味など並べつつ、私は木崎さんを伺い見た。

「一応さ……音の発生源を見てきてくれませんか？」

「何故私が」

ああ、そう言うと思ったよ！

「だって、私が見に行つて、対処しきれない相手とかだったら」

「……つまり怖いのか」

「そうだよ！ 悪いか！ なんか怖くて落ち着かないんだよ！」

と、木崎さんは。

フンと、何故かいつもよりも柔らかく、笑った。

「素直にそう言えばいい」

へ？

するりと立ち上がった彼は、あっさりと、まだかりかりと音がし続けている一角へと歩いていく。

何その反応。

何その顔。

不意に紳士的な行動されると、思わず別の意味でドキドキするじゃないか。

そんな私をよそに、木崎さんは手を伸ばして、こつこつと、壁を叩く。

と。

こんこん、とまるで返事をするかのように、音が。

「ひ……人！？」

「黙っておれ」

静かだけど、威圧するような声。

思わずびしっと固まった。

そして……木崎さんは。

ばきっ

……ばき？

壁に手がめり込んでるように見えるんですけど、目の錯覚ですかね？

ごしごしと目をこすって、前の情景から逃避を図る私を放っておいたまま、先方は勝手になんか進めていく。どんどん、めり込んでいく、彼の腕。

「き……き、きざ、き……」

口をパクパクさせ、それでも、損害を受けている壁について、問いたださなくては、と口を開こうとした。

「そ……その穴については」

彼は、ふうつと溜息をついた。

「やはり、貴様が」

ぐいっと、何かを掴みだすように。

「何しに来た」

「いてえいてえ！！ 木崎！ もうちよつと加減しろ！！！」

叫びながら出てきたのは。

やはり小さなサイズで（あ、木崎さんは基本的に、生活するのに面倒だから、普通の人サイズになってもらっている）、それなのに、妙に態度のかい……それが、こっちをみて、にっと笑った。

「……お、人か！」

「……あんた、誰？」

（2011/2/23）

一度ある事は二度あるものです（下）（前書き）

気が付けば、何かが増えていた。

一度ある事は二度あるものです(下)

てしがわらまきたか
勅使河原雅崇、と名乗るその……人？は、木崎さんの同郷らしい。
つまり、この人も魔物の世界の人なのね。人って言っているのかど
うかわからないけど、表現にも困るので、人って事で通そうかな。
などと考えていると。

「幼馴染ってやつだな」

「誰と誰が、馴染みだというのだ」

「照れるなつて木崎」

「誰も照れてなどおらん！！」

照れてるっていうか、なんか、怒ってる気がするんですが。

木崎さんが結構食べるので、そこそこ用意してた年越し蕎麦を、勅
使河原さんも、ずるずるとすすする。

「美味しいもんだな」

「そりゃあよかった……つて、何落ち着いて食べてんですか」

「魔界から此処まで来ると、腹減って敵わねえよ」

「貴様！ 私の分がなくなるであろうが」

「君達は突っ込みどころがずれてる！！」

「かりかりすんなよ、禿げるぜ」

「誰が禿だ！！！」

「あー、そうだな、あんた女だもんなあ……失礼した、ふける、に
しとくわ」

「そういう問題じゃねえだろ！！！」

勅使河原さんと喋っていると、なんだか血管切れそう。

見かねたのか、それとも、煩いと思ったのか……多分後者だな、木
崎さんがすぱーんと、いい音をさせて、手を振り下ろした。
え？

すばーん？

よく見ると、彼の手には、何か扇のようなものが握られていた。扇、
と言いきれないのは、素材がどう見ても紙じゃないから。

何それ？　もしかして、鉄扇とかいうあれ？

でも、鉄にも見えない。何でできているんだろう。

勅使河原さんが、呆れ顔で言った。

「何だよ、そんなガキの玩具持ち歩いてんのか」

「我が鉄扇は、玩具などではない、それは貴様のガラクタの事ぞ」

「ガラクタ呼ばわりすんじゃないやねえよ、あれにや俺の魂が入ってるんだぜ！」

「あーのー……」

全く、息を吸い込んで、腹の底から声を出さないと、この二人の間
に入り込めやしない。

やっと気が付いた二人が、こちらを見た。

「おう、何だ？」

「何ぞ？」

「色々聞きたい事があるんですけどねえ」

木崎さんの手の――ああやっぱり、素材はともかく名前はそうなん
だなと思いつつ――鉄扇とやらはなんだとか。

ガラクタってなんの事とか。

そもそも、なんで此処に勅使河原さん来てるのかとか。

勅使河原さんは、なかなか面倒見がいいらしい。

つまりは、幼馴染で仲のいい（……には疑問があるが）木崎さんを
心配して、様子を見に来ようと思った、と。

「だって、思った通りのところに来れるとは限らないって」

確か木崎さんが前にそんなような事を言っていた記憶がある。

「お、よく知ってんなあ」

勅使河原さんはにやりとした。

「だから、勘で来てみた」

おい。

「ちょうど此処に当たってよかったぜー！ まあ俺と木崎の仲だから、何とかなるとは思っていたけどな」

「仲とは何だ……貴様とはどのような仲にもなった覚えはないが」

「固い事言つなよ、だから背が伸びないんだぜ、木崎は」

「喧しい！！」

そうそう、この二人、かなり身長差がある。どちらかと言うと小柄な木崎さんに、大男の部類に入るだろう勅使河原さん。

「ま、美味いもん食って落ち着いたし、木崎の顔も見だし、そろそろ行くかな」

「え？ 帰っちゃうの？」

「用は済んだからな」

勅使河原さんは、どこころしよっと、立ち上がって、さっき引つ張り出されてきた壁の穴に向かおうとして。

棒立ちになった。

「ど、どうし……」

言いかけて途中でわかった。

あれだけ派手に開いていたはずの穴が、ふさがっている。何もなかったかのように。

「なあ、木崎」

呟くように、勅使河原さんが言った。

「ちよつと聞きたい事があるんだが」

「年なら明けたぞ」

「まじかよ」

首を振る勅使河原さん。言われてみれば、時計の針は12時を過ぎていた。余りに騒がしいんで、いつ年を越したのかわかんなかった。

「な、何事？」

確かに、セーので、明けましておめでとうはできなかったけれど、それがどうかしたっていうんだろっか。

「すまねえ」

いきなりがばつと、膝をつく勅使河原さん。驚いて私は、つられるように正座してしまった。

「次の年が終わる頃まで、帰れねえ」

……

……

……

は？

「通常移動のできる時間は決まっていますな」

木崎さんが静かに言った。

それぞれの世界によつて、それは違いがあるそう。

「年が終わる直前、そうだな、そなたにわかるように言えば、12月31日の午後11時50分から59分59秒までが、魔界と此処を行き来できる事になっておる」

「……って事は、つまり、勅使河原さんは、次の」

「ああ」

12月31日まで、帰れないって事で。

可笑しそうに、木崎さんは笑う。

「魔王ならば、即座に道を開けようが、私はまだ候補故、道を開く事はならぬな」

「ならばいますぐ、魔王になれ」

「叶えてもいいが、そなたに協力してもらわねばならぬ」

「協力？」

「忘れたか？」

……あ。

そうだった、彼の魔王になる試験とやらは、私が彼に惚れ込まない事には終わらないんだった。

「そなたが今すぐにでも我がものとなれば、試験は終了故」

「いや、まだ魂をそんな事で売れないから」

「なんだよ、あんたが木崎にぞっこんになってさえくれりゃ、全部解決だぜ」

「簡単にそついう事を言うな！」

机に置いてあつたコップに、年越し用においてあつた日本酒を、なみなみと注いだ。

一気に飲み干す。

食道から胃袋が、かっとなえ上がった。急な刺激に目の前がゆらりとする。

だけど。

それでもなきややってられない気分だ。

「ねえ、木崎さん」

「何だ？」

くつと首を傾げる彼の動きに沿って、柔らかそうな茶の髪が揺れた。茶の瞳が、光の加減か、僅かに緑がかって、それはそれは不思議な色になる。白い肌は、部屋の暖かさの所為か、それとも、少量の酒を口にした所為か、仄かに赤みがさして。

目の前のこの人は、その姿で、薄く笑みを浮かべた。

「言いたい事があるならば、聞いてやらぬ事もない」

「……勅使河原さんのこの状態、これ幸いと利用しようとしてない？」

「当たり前だろう」

涼しい顔で、木崎さんは頷いた。

「策など臨機応変、幾らでも形を変えるもの……使えるものは使う」

……わかつてはいたけどさ。
とりあえず、殴らせる。

握りこぶしを作って、しゅっと。私の手が空気を切り裂いた瞬間だった。

ぱつと。

木崎さんが私の手を受け止める。

ああ、いらいらする。バシッと決まらなないと、このもやもやは収まりそうにない。

もう一度ぐーパンチだと、手を引きぬこうとしてもがいてみるものの、木崎さんの握る力はかなり強い。おさめられてしまった私の手は、びくとも動かない。

「だが」

「何よ」

目が合うと、何故か、木崎さんはすつと瞼を伏せた。

「……まだ終わらせるには惜しい」

「は？」

キョトンとする私。

隣で勅使河原さんがにやにや笑ってる。

「つまりな……」

「黙っておれ、勅使河原」

「あー、はいはい」

「つまり、何」

焦れた私が口を挟んだ。

すると、木崎さんのあの、不思議な色の瞳が、私の瞳を射抜く。

何だろう、この感覚は。

熱いような寒いような。ドキドキとして、顔が熱いのに、指先がすうっと冷えていて。喉がひりひりとしてるけど、乾いている訳じゃ

ない。

そして、どくどくと、頭全体が、血管になったかのように、脈打つ。耳にその音がわずらわしい。酷く。

何も聞こえなくなってしまういそうなそんな中で。

か細い木崎さんの声だけが、はつきりと聞こえた。

「そなたとの、此処での暮らし、悪くない、という事よ……」

ああ。

そんな顔で、そんな声で。

そんな事言われたら。

「わかったわよ……」

こう言うしかないじゃないか。

「いいよ、いて……」

此処に。まとめて、面倒みようじゃないですか。

「ぷ……く、はははは！」

張りつめていた空気を、バンと叩き割るような、豪快な笑い声が起きたのは、その後だった。

発生源は勅使河原さんである。

「おもしれえ、あんた、おもしれえよ！ いい感じにずれてる！」

「私の何がずれてんのよ」

「木崎にああ言わせておいて、これか！ ははは！」

何だよ。だって、まだ此処にいたいんでしょう？ しかも、勅使河原さん帰るところないんだから、まとめて引き取るしかないじゃないのさ。

むっとした私と。

酷く機嫌の悪そうな木崎さんの目があう。そして、どちらからとも

なく、頷いた。

「煩い！」

「喧しいわ！」

すぱーんと。

勅使河原さんの頭上に、木崎さんと、私の平手が、炸裂した。

(2011/2/24)

やっぱり太陽は偉大です（前書き）

そんな訳で、三人暮らしになったある日の出来事。

やっぱり太陽は偉大です

「勅使河原さん」

「なんだよ、野暮つてえ呼び名だなあ」

野暮つたいつて、そもそも、自分の名字でしょうが。全国の勅使河原さん敵に回したいですか？

「もうちよい、その、なんだ、フレンドリーつつつか……雅崇とか、テッシーとか」

「テッシーって呼ばれてるんですか」

「なんならマサの兄貴！！でも構わね……」

「そうですか、で、勅使河原さん」

「……」

抜けるような青空。風は少々冷たいけれど、日差しは心地よい。こんなお休みのお出かけ日和に、勅使河原さんと連れ立って歩いているのは、買い出しの荷物係って事で。

元のサイズになってみれば、勅使河原さんは、とにかくでかい。

180はあるのかという長身、そして、ガタイがいい。

流石に、木崎さんの衣類の着回しって訳にもいかず、まずは、その調達。

それから、食料の調達その他（三人で暮らすとなると結構物入りだつたりする）、という訳で。

如何にも力持ちに見える勅使河原さんは、実際にかなり力強く、平気な顔でひよいひよいと荷物を持ち上げると、じゃあ次、とさっさと歩き始める。

「なんだよ都、^{みやこ}まだ根にもってんのか？ ふけてるって言った事
いつの間にか、下の名前で人の事呼んでいやがる。」

「別に」

「やっぱそうじゃねえか……」

勅使河原さんが帰れないとなつて、迎えた新しい年。騒ぎにすっぱり眼が冴えて、そのまま初詣、そして、朝日まで拝んでしまつて、しかる後に、力尽きて就寝。

なんか、散々な正月だったけど、上ってくる朝日は、何時もと変わらないと思うのに、神々しく美しくて。

木崎さんが、日の出だ……とぼそつと呟いて、手を合わせてたのを覚えてる。

「木崎は、太陽が大好きだな」

「は？」

まあ、晴れの日が嫌いって人はそんなにいないと思うけれど。

「違う違う、晴れ、っていう意味よりも、太陽そのものが好きなんだあいつ」

「……はあ」

言われてみれば、木崎さんって、毎朝日の出を見ているような気がする。特に理由は言っていないかったけれど、一度早起きした日に、何時までもベランダに向いて動かない姿を見て、ああそんなに朝日が綺麗だったのかしら、とか思っただけだ。

「あいつが言うには、日の光からエネルギーもらうんだと」

「お日様に？」

「そうそう、日課でな、あれやらないと調子でないらしい」

勅使河原さんはくすつと笑う。

そういえば、今日はめつたにお目にかかれないうような晴天。木崎さんは、買い物に付き合わない理由を有事があるって言うていたけど、心なしか顔色が悪くて、家で休んでいた方がいいんじゃないかなとか、ちよつと思つたのだった。

「今頃、何処かで思いつき日光浴してると思うぜ、このところ、雨模様で不調気味だったしな」

「……爬虫類か」

お日様がないと、不調だなんて。
くすくす、と。

日光浴をしている彼の姿を想像して笑い出した私に。
勅使河原さんが、晴れやかな笑顔を見せた。

「やつと笑ったな」

「そう?」

「ああ、あんた笑ってる方が断然いい」

そりゃあ、色々ありすぎて、笑うどころじゃなかったからだよ、と
突っ込みたい気もしたけれど。

何が嬉しいのか、勅使河原さんは、にこにこしている。邪気のない
その顔を見ると、なんだか、何もかもどうでもよくなりそうな
くらい、人のいい表情だ。

悪い人……じゃあないんだろうなあ、とは思う。

「さて、お姫様」

恭しく頭を下げて（といっても、両手に紙袋やビニール袋を抱えて
いるんだけどね）、勅使河原さんが言った。

「そろそろ、空腹な頃合いと違うか?」

言われてみれば、結構いい時間。

「確かに……木崎さん多分家に戻ってるよね、急いで食料買わなく
ちゃ」

「急ぐ必要ねえよ」

そう、紙袋を下げたままの勅使河原さんの手が、するりと上がって、
一方を指さす。

「あ」

すつと。

背筋を伸ばして空を見ている、後姿。

「木崎、さん……」

小さく呟いた声が聞こえたかのように。

こちらを振り向く彼の顔。

きらりと目が光っていた。

確かに、朝出がけに見た時の、しおれたような様子が一変している。

どこがどうって訳じゃないんだけど、生き生きしてるように思えた。

「すげえ、日光って偉大」

「だねえ」

思わず、勅使河原さんと、囁き合った。

(2011/2/25)

腹が減ると戦はできないものです（前書き）

そろそろ、おなががすく頃合いかな…という時間になって。

腹が減ると戦はできないものです

安くて美味しくて、なおかつ手軽となれば。

「うめえ」

勅使河原さんの大きな手につかまれたおにぎりは、あっという間に口の中に消えた。

「ふむ」

木崎さんも、頷いて、忙しく口を動かし、あっという間に二つ目を平らげる。まあ、基本的に何を食べても気持ちのいい食べっぷりを見せる人だけど（正月の餅の食べ方は圧巻だった、どうやらポテトチップス同様お気に召したらしい）。

「ちゃんと食ってるか？」

「食べてる食べてる、ってかあんた達早すぎ」

ちよっと、げんなりした気分で、ペットボトルのふたを開けると、グイッと中身を飲んだ。

お昼ご飯は、テイクアウトの肉巻きおにぎり。

ご飯をどうしようかと、歩いている最中。評判の屋台の前を通りかかった時に、勅使河原さんがその行列に興味を示した。

「何だあの列？」

「ああ、今結構人気なんだよね」

「食い物か？」

「うん、薄切り肉を巻いたおにぎり」

へーっと、返事をしたかどうかのうちに、勅使河原さんは、列の後ろについていた。

「ちよっと!？」

「美味いんだろ？」

ケロッと彼は言う。

「だったらこれにしようぜ」

「え」

買って帰っても構わないのだけど、でもどうだろう。おなががすくと実は一番不機嫌になって手におえない木崎さんを、振り返った私はおどおどしていたのかもしれない。

「フン」

愉快そうな眼をして、木崎さんは笑った。

「構わぬわ」

性格が本当に出るといふか。

勅使河原さんの食べ方は豪快だ。片手でひょいとかんで、まるっと口へ、というペース。

一方木崎さんは、綺麗な食べ方をする。手でつかんで食べているだけの筈なのに、仕草が優雅で、つい、ぼうつと見とれてしまいそう。

二人に共通しているのは、どちらも見ていて気持ちがいいくらいに、すっかりお皿を空にしてしまう事だろう。

「毎度の事だけど……いい食べっぷりだね」

苦笑しながら、私は二つ目のおにぎりをかじった。

「外というのも悪いものでもないな」

木崎さんがぼそりと言って、勅使河原さんが、だろ、と伸びをしながら笑う。

「天気の良い日にゃ、こういう食事悪くないぜ」

「……ああ」

珍しい。二人の意見があっている。

もしかして初めて見る光景かもしれない。

かじっていたおにぎりが落ちかけて、慌てて両手で押さえる私に。

「……何を見ている」

いささか温度の低くなつた木崎さんの声。

(
2
0
1
1
/
2
/
2
7
)

腹が減ると戦はできないものです（後書き）

別に私がおなかすいている訳では…（笑）

2月と言えば節分です（前書き）

そんな訳で、三人暮らしが軌道に乗った？

2月と言えば節分です

「節分か」

ばさりと、新聞の音をさせて、木崎さんが言った。

因みに、新聞なんて毎日とっている訳ではなく、たまたま、電車の中の暇つぶしに私が買ってきたものを、彼が丁寧に読んでいただけである。

「豆をまくんであつて、この辺じゃ餅はまかないよ」

そういう地域があるって話も聞いているけど、残念ながらこのあたりにはない。

慌ててそう釘を指せば、わかっていると睨まれる。

「そなた、私を何だと思っている？」

「え？　だってそういう話じゃないの？」

「……」

てつきり、餅にしか目がないんだと……と、口を滑らせかけ、ぞくぞくとするような冷たい目で見られた。

「鬼だあ？」

一方、勅使河原さんは少々不機嫌だった。

「こちとら、そう簡単には退治されねえ鬼だぜ」

「誰も勅使河原さんを退治するなんて言つてない」

節分の話が、いたくお気に召さなかったらしい。

何でも、勅使河原さんの家は、鬼を自称するのだそうで（多分、怖いとかおっかないっていう意味なんだろう）、それは自分の家を敵に回すとも取れるような話に、へえそうですかと、笑う事も出来ないだろう。

「私は、鬼は外なんて言わないよ」

それに、そういう地域もあるんだよと、一応、世間の波に乗るべく買ってきた豆を手渡しながら言う。

「先祖が鬼だつて言ってる人達がいるところもあつてね、そういうところだと、鬼も内、つてまくんだ」

小さい頃に読んだ、絵本を思い出しちゃう。

鬼の子が、母親が病気で寝ている家の子に、ご飯を差し入れてあげる話とかさ、友達をかばって自分は旅に出ちゃう鬼の話とかさ。

「うーん、流石に何か悪いものを進んでどうぞって入れたくはないけどさあ、でも、何ていうか……」

何もしていないのに、悪いと決めつけるのも、如何なものか。

と。

勅使河原さんは、こらえきれないというように笑い出した。

「あんた、本当面白いな」

「へ？」

木崎さんの方は、こつちを見ようとししない。

多分私達の会話は聞こえているんだろうに。

無視してまた、新聞を広げた。

「だから俺ら、此処んちにいられるんだなあ、しみじみ思っちゃったわ」

「一人で何勝手に納得してんのよ」

「褒めてんだぜ、一応」

「はあ？」

だから、説明しろと、言いかけた私の頭に。
ぐしゃぐしゃと。

武骨な、でも温かい大きな、掌。

勅使河原さんの手が、私の頭を撫でている。それ以上やられると、髪がくしゃくしゃなんですが……と思いつつ、でも、手の温かさが、なんだか心地よくて。

何を言っていいかわからず、とりあえず、そろそろやめろという目を向けてみれば。

「いい奴だな」

そう言いながら、にこにこ笑っている、勅使河原さん。

「何それ」

褒められているらしいのはわかった。そのくすぐったさと、やっぱり読めない話の筋に、いらっとする気持ちと。

その上、話に参加しようとしないう木崎さんがどうやら、勅使河原さんの言いたい事がわかっていているらしい。普段なら何か言ってこそうなものののに、全く突っ込んでこない事。

そんな二人どちらにも対する、何とも言えないじれったさ。何を言っでいいかわからなくて。

結局私がしたのは。

「この、鬼!!」

勅使河原さんに向かって、思いっきり豆をぶつける事だった。

(2011/2/28)

ホラー映画にはお供がいた方が多分いい（前書き）

三人暮らしの日常風景とは。

ホラー映画にはお供がいた方が多分いい

「がるる……」

大きめの膝掛をすっぽりかぶった私は、端を握り締める。

「そんなに恐れるのであれば、見なければよい」

さつさと寝てしまえ、と言わんばかりの木崎さん。

「だつてえ……」

「まあ、そう言っただけ」

割って入ったのは勅使河原さん。

「見たくもねえが、一人になるのも嫌ってところだろ？」

間違っではない。

間違っではないが。

したり顔が、憎らしい。

できる事ならひっかいてやりたいが。

残念ながら、膝掛に守ってもらっている状態で、其処から出る事が出来ない。

だけど、こっそりと様子を窺うと。

目があった木崎さんは、理解できぬ、という表情をして首を振った。

珍しく、積もるくらいの雪に、家にいるしかなくなった私達は、暇をもて余していた。

そこに、バイトから帰ってきた勅使河原さんが（そうそう、勅使河原さんもバイトと称して何やら稼いできている、今日はこの気候だから早く帰れたらしい）、知り合いから借りてきたという、映画のDVDを出してきた。

「これ……」

オカルトとかの範疇。

上映されていた頃のコマーシャルを見た覚えがある。結構、ぞくぞ

くした。

「へえ」

勅使河原さんが面白そうだと、主張し、三人でそれを見る事になったわけだが。

実は私、オカルト、弱い。

「涙目だな」

「うつさい、欠伸しただけだ」

「だから先に休めと言ったであろっ」

「だから、うつさい」

かなり、これは、怖い。

よくできている、思わず自分の後ろを確認してしまいたくなるような、そんなリアリテイ。

そんな私を、面白そうにいじる勅使河原さんと、くだらないという顔で見る木崎さん。

二人は怖くないのか？

「いや、まあ、よくできてるとは思っけどな」

「……それだけの事」

木崎さんは、切り捨てるようにそう言い。

勅使河原さんは、困ったように頭をかいた。

「そもそも、俺ら見慣れてるっていうか……」

そうね忘れてたわ。この人達は、そもそも人でない。魔界の住人。こんなの怖い訳ないんだっただわ……

「あー、あの牙、ちょっと違うな」

「仕方あるまい、この世界では本物など見た事無かるっ」

「だなあ」

「だが、角はよい」

「何だ木崎も見てたのか、あれはそっくりだな、作り物に思えねえ」

冷静に、品定めをするな！！
ってか、本当にこんなの、魔界にはごろごろいるのかよ！

夜半。

ふっと目が覚める。青白い天井が目に入った。
隣を見ると、小山……もとい、毛布をかぶった勅使河原さんの影。
そして反対隣。

「……木崎さん」

彼は、座った姿勢でそこにいる。

何時もはこんな風に、すぐそばで寝ている訳じゃない。

此処はちよつと駅から距離があり、少々古い物件で。その代わりというか、部屋は、ゆとりがあるつくりになっている。

三人くらい、寝るには、少々狭いかもしれないが、まあやってできない事もない、という感じで。

それに。

そもそも、二人が自分のサイズを小さくしてしまえば、部屋の広さなど何の問題もない。プライバシーだのなんだのと称して、普段は二人とも小さくなって、自分の場所を確保している。その方が私ものびのびできるしね。

今日は、でも。

そんなのはみんな取っ払ってしまった。

理由は私にある。余りに怯えてびくびくしているのを、見かねた二人が、私を間に挟んで強引に布団を敷いてしまったのだ。

「少々きつくても文句言っなよ」

敷布団の上に、私をどさりと下した勅使河原さんは、開いた手で、厚手の掛け布団を奪い取る。

「とりあえず、これ借りるわ、そこそこ厚さもあって寝袋みたいに

できるし」

「構わぬ」

「木崎は……後は、枕くらいか？」

「余計な事をするな、貴様と違って私は何処でも休める」

そう言つと木崎さんは、敷いた予備の毛布の上に横になり、片手で余つた部分を引つ張り体にかけてと、横を向いてしまった。

やっぱり、寝辛かつたのかな？

此方を振り向いた彼の顔は、暗くて見えない。

「眠れないのか？」

「うつん……なんか目が覚めただけ、木崎さんは寝てないの？」

「いや」

首を振る気配。

あれ？

なんだか元気がない。

まさか、まさかと思うけど……ホームシックとかじゃないよなあ。

映画見て何かが恋しくなつただとか。木崎さんがそんな事言いだすのなんて想像つかない。

だけど。

まさか。

「ね、木崎さん」

私は起き上がつて、体をずらすと、敷き布団を叩いた。

「体痛くなるよ、それ薄いし……ちよつと狭いけどよければ」

「何を言っている」

少し驚いたらしい、声。相変わらず顔は見えないけれど。

「だつてさ、ほら……すぐそばに誰かいた方が、安心するから……駄目？」

溜息の音。

「……甘えるでないわ」

そう言いながらも、毛布ごとごろりと、木崎さんが転がつてきた。

こちらに背を向けて。

「さつさと寝るがいい」

「うん」

「もう少しこちらに寄っても構わぬ」

「……うん」

毛布越しに、背中合わせ。うつすらと感じる息遣い。
不思議な夜になった。

後日、例の映画に出ていた怪物みたいなものの一つが、木崎さんの可愛がつてるペットにそっくりなんだと、勅使河原さんが教えてくれた。

「角もつてて、あの目だから結構怖がられるんだけどさ、人懐っこい生き物なんだよ案外」

可愛いんだぜと笑う、勅使河原さん。

可愛いのか……可愛い……うん。

「だから、そんなにビビると木崎、悲しむぜ」

「そつか……って何で？」

「だって、あんた、慣れとかないといずれ木崎と暮ら……ごふう！」
勅使河原さんが最後まで言えないように、とりあえず鳩尾にストリートを叩きこんでいた。

(2011 / 3 / 4)

病気の時は誰かいてくれた方がいい（前書き）

ごく普通に生活しているつもりでも、色々な事が起きるもので…

病氣の時は誰かいてくれた方がいい

気が付けば、表情のない顔が、見下ろしていて。

「き……ざき、さ……」

名前を口にしたただけなのに、綺麗な形の眉が、顰められて。ずっと視界から消えた。

「全く」

視界に現れたもうひとつの顔。

「どうだ？ 起き上がれそうか？」

ひよいと差し出された腕に捕まると、それは、力強く私を引き上げる。いきなりのせい、目の前が、くらりとした。

「食べそうか？」

勅使河原さんは、私が座つたのを見届けてから、湯気のたつ茶碗を手し、顔を覗き込んでくる。

「お粥？」

木崎さんもだけど、勅使河原さんも、料理をしている、というイメージがない。そもそも、この家にいて彼らが何かを作るなんて事、これまで一度もなかったのだから。

一体何が入っているのか、思わず身構えたが、見た目は普通の白粥だ。

「レトルトっつーのか？ あつためたただけだ」

そんな不安を見透かしたように、勅使河原さんは笑う。

「喉を通るようなら、食べておけ」

それまで黙っていた木崎さんが、低くそう言つて。

「……うん」

私は、スプーンを受け取つて、お粥を口に運ぶ。とろりと塩味が広がって、美味しかった。

雑魚寝が寒かったのか、それとも他の要因か。

風邪気味だなとは思っていたが、流石に熱が出て、彼らも慌てたらしい。聞けば、風邪なんて知らないそうで、とにかく苦しそうだからどうすればいいのか、と色々調べた、と勅使河原さんは言った。

「木崎と手分けして買ってきた」

指差す先に、スポーツ飲料やら、レトルトやらの山……

その、常軌を逸した分量はどうよ、とは思うものの。

「えへへ」

何だろう。ふわふわといい気持ち。

心配してくれる相手がいる。

悪くないかも。

最も、体調が落ち着いてからも、私達の食事が、各種レトルト粥とスポーツ飲料攻めになった事は、言うまでもない。

(2011/3/6)

病気の時って甘えてみたくなるものです

「都」

低いが、よく通る声が、私を呼んだ。

「あ……」

ゆらりと、水底から浮上するように、意識が戻って。目を開けば、ぼんやりと薄闇に見慣れた天井。

魘されていたらしい。

じわりと湿る額に手をやって、溜め息をついた。首筋が、しつとりとしている。たった今まで、体温と同じはずだったそれが、意識した途端に、どんどんと冷えていき、ぶるっと、背筋に震えが走った。不快感に耐えかねて、あたりを見回す。

此方を覗きこんでいる目は、何時もの色。

見慣れた光景。

その事に、酷く安堵して。

「ね……」

水が飲みたい、と。

まるで弱っているような事を言ってみた。

「フン」

呆れたように鼻を鳴らして、でも。

木崎さんは、すつと立ち上がる。

「その前に着替えの方が先ではないのか？」

「……かもしれない」

「さつさと済ませておけ」

それだけ言い残して、後姿が、薄暗い部屋の中消える。

もぞもぞと起き上がり、乾いた布地に腕を通せば、肌に張り付かぬそれが、想像以上に気持ちがいい。襟足の髪がしつとりしているのを、弾き飛ばすように外に出せば、やっと人心地ついた。

枕にタオル敷いておいてよかった。

そんな事が頭を巡って。

ぺらりと、枕から、水分を含んでしまったタオルを外して、脱いだものとまとめて、立ち上がろうとすると。

「……全く」

世話の焼ける、と冷たい声がして。

手の中にあつたものがばさりと消えた。

「え？ 木崎、さ……」

「病人なら病人らしくおとなしくしておけ」

「で、でも」

言い返そうとした私の頭に、乱暴にかぶされたのは、大きなタオル。もしかして、バスタオルだろうか？

枕にかけるには大きすぎだけど、つまりこれで汗ふけて事？

とはいえ、大きなタオルにすっぽりと視界が塞がれて、じたばたとしていれば。

しばらくして、タオルは取り除かれて、部屋の光景が戻ってきた。

「私の言う事を聞いていなかったと見える」

「いや、その、あのね」

言いかけた言葉を封じたのは。

ひやりと冷たい手、額に当たって。

ぞくり、とした。でも肌が粟立っているのに、それは気持ちのよい温度。思わず目を閉じてしまいたくなるような。

「……まだ熱い」

「うん……そうかも、ちょっとくらつとする」

「ならば、己のすべき事はわかるな？」

ちよつと考えて。

「……寝る？」

「わかつているなら最初からそうすればよかるつ」

「……ん」

僅かに不機嫌そうに見える木崎さん。

それでも、持ってきてくれたコップを受け取り、飲み干した水は、ぬるすぎず冷たからず、美味しくて。

「美味し」

「フン」

「……ありがとう」

すっと背けられた顔。でも。

あれ？

なんか、白い彼の頬が少しだけ、赤みさしてるようにも思えて。思わず口走っていた。

「……もしかして、照れてる？」

「喧しい、下らぬ事を言っている暇があれば、さっさと寝てしまえ」
冷たく響く声。

可笑しいね。冷たいのに、その声が酷く心地いいなんて。

きつと、熱の所為で、体だけじゃなくて、気持ちも弱っているに違いない。

木崎さんの言う通り、さっさと寝て、治してしまうに限る。

そう思って、目を閉じて。

でも、見慣れた部屋が、あの人が。

見えなくなってしまうのが少しだけ寂しくて。

片手であたりを探ると、自分のものじゃない何かにぶつかった……
手。

「何ぞ？」

「……なんでもない」

「……そうか」

口を閉じれば、辺りは静まり返る。

だけど、触れた先。

少しひやりとしたあの手は、まだ其処にあつて。用が済んだらさつさと自分の場所に戻ってしまうかと思つたのに。黙つて、其処にいる気配。

もしかして、ばれているのかな。今の、人恋しい気持ち。それで、こうしていてくれるのだとしたら。だとしたら。

(……ありがとう)

直接伝えてもきつと、照れてしまつて受け取ってくれない。だから。

心の中でそつと、感謝を。

(2011/3/11)

月夜の晩に（前書き）

ようやく風邪も癒えてきました。

月夜の晩に

カーテンの隙間から、明るい月。

満月でもないのに、やけに眩しい。

寒い所為かな？ 空気が綺麗だから、きっと、月が明るく感じるのに違いない。怖いような美しさと思うのに、目が離せない。

怖いもの見たさ？

いや、ちよつと違うだろうか。

そんな事を考えていれば。

ふと。

すぐ後ろに、気配。

「ぎゃああああ！」

平謝りだった。

「全く」

木崎さんは呆れ顔。

さつきまでは、耳がガンガンすると、片耳に人差し指を突っ込んで盛大にしかめっ面していた。

最初は多分、いや間違いない怒っていたんだろうけど、今はどう見ても呆れているとは思えない。

そんな状況にちよつとだけ安心する自分もどうかとは思うが。
でも、ね。

「フィクションに毒されすぎぞ……」

「でも、後ろから音もなく近づくと、ついそついうの想像しちゃうじゃん」

首筋に空気が当たって、思わず叫んでしまったけど、それって、木崎さんが、私の肩に、そこらにあった膝掛をかけようとしてくれた

からだった。

それで空気が動いただけ。

勅使河原さんもそうだけど、木崎さん、結構音もなく行動するから視界に入っていればそれでも、大した問題じゃないけど、いきなり背後取られるのは流石に驚くつての。

吸血鬼かなんかかと思った、そう言えば。

甚く不快な様子で。

「血等、欲っさぬわ」

びしいつと音がしそうなくらいに、深く刻まれた眉間の皺。

確かに、発想がまずかったのは認める。

うん、そうだよな、この間の風邪を見ているから、冷やすのはよくないだろうと、木崎さんなりに考えてくれたわけだし。まずはありがとうと言っべきでした。

「……でも」

そういえば、魔界の主食って、何だろう。

木崎さんも勅使河原さんも、食事に関しては、あっさりこちらのものを、何の疑問もなく口にしてる。

そりゃあ、時々、これはなんだ？ という反応はするけれど、出されたものに関しては、食料という範疇で解釈してる。

「大きくは変わらぬ」

木崎さんはそう言った。

肉や魚、穀類、野菜。

種類は少々違うようだが、そういったものを口にする、という点では、変わりがないらしい。そうそう、木崎さんの餅好きは、向こうにいた時からなんだって。

「というか、魔界にもお餅ってあったのね」

「まあな」

突っ込みどころはそこか、と呆れながらも、話してくれる木崎さん。

料理もそれなりの種類あるようだし、いいとこの坊ちゃまである彼の家には、専任の料理人の存在もあったというから、事情は此方と似たようなもの、と考えていいのだろう。

ああそういえば。

向こうには、ポテトチップスはないらしくって、木崎さんが最初の頃、こんなに美味しいものがあるのかと、感動していたな、とふと思いついた。

それとも、ジャンクフードなんか食べちゃ駄目っていう教育？

くすくすと笑っていると、何がおかしい、とじろりと睨まれて、首を絞めてなんでもないと返した。

「別に、ちよつと思いついたただだから、気にしないで」

「フン、ただ……」

いいよどむ、彼。

「？」

「そなたらが、思いもつかぬような糧、も、ないとは言えぬな」

「それって？」

微妙な顔になった、木崎さん。

珍しいな。

どう言っているかわからない、そんな顔して、目をそらしてる。

別に人種……いや、種族？　なんて表現していいかわからないけど、大元が違ふんだから、違う食生活があっても不思議じゃないんだけどな。

それとも、本当にホラーな世界なんだろうか？

先日の映画であまりにも怯えすぎて気を使わせてしまっているだろうか。

そう思っ

「説明が難しいの？」

助け船出してやったのに。

「……そなたでも理解しやすい喩えが見つからぬ」

無性に、殴りたくなった。
(2011/3/10)

同居する事の、いい面と悪い面（前書き）

人がいるってのは鬱陶しい事もあるけど、ありがたい事もある。

同居する事の、いい面と悪い面

「掃除機かけるから」

号令をかけて、スイツチ稼働。

たまにはこうして、大掛かりに掃除しないと、流石に三人もいると、いるだけでも、埃が増えてくる。

「都は綺麗好きな方か？」

勅使河原さんに聞かれたけど、絶対違う。

そもそも綺麗好きならこんなに色々貯めてないよ。しゅしゅやってるだけ、くしゃみ出るから。

そんな会話をしつつ、それでも雑巾を手にした勅使河原さんは、棚の上を拭いてくれていたりする。

埃取りのモップとか、カーペットを掃除するぺたぺたしたシートのついたクリーナーとか。なんだか面白そうに、掃除グッズをしげしげと観察してた。

一体何が、彼の興味を引いたのかな？

「そんなに面白い？」

「ああ、なんか応用できねえかな」

そもそも何に応用するのかとか、疑問は次々に湧いて出るけれど、勅使河原さんは、発明というか何か作る事が大好き。この発想を聞いていたら日が暮れるので、今日はとりあえず、追及はやめておくとして。

……。

そう。

この家にはもう一人いましたね。

さてそのもう一人である木崎さんは、でんと陣取った椅子の上、のんびりと何やら読んでいたりとか、埃のもうもうとしてる中で、平

然とお茶していたりとか（注意：コップや湯飲みではなく、ペットボトル使用です）。

ぼんぼんらしいというのか。

ああまた、優雅にペットボトル傾けて。

なんか、そうしてる様子を見てみると、手伝えっていう気もそがれるけどね。

「結城」

「何？」

「そろそろ終わらぬか？」

「……まだだよ」

顔を上げもせず、何か本読ンでる。

図書館の存在を知ってから、木崎さんは色々な本を借りてきて読み始めた。曰く、情報収集の一環だそうだ。

ビジネス系から始まって、娯楽小説や歴史の本とかも見ている。分厚い哲学書や、物理化学の本なども、表情一つ変えずにあっさり読んでしまうので、本当に頭に入っているのかと以前質問してみたが、反ってきた答えが難解すぎて此方がわからないという落ちに、それ以来、本についての質問はやめた。

それでもまあ、勅使河原さんの手伝いもあって（とはいえ彼は、何か興味をひかれると調べ始めて納得するまで終わらないので、引つかかると大変なんだけど）今日の掃除は終わり。

しばらくはやらなくていいなこれ。

「おなかすいた」

時計を見上げれば、ご飯時。

こういう時に、作っておいたよ、とかそういう声があると、すごく感謝するんだけど、そんなの期待できる訳もなく。

「今日は何味にする？」

先日の私の風邪騒動の時の買い置きレトルトの在庫からがさがさと

探しだし、各々好きなものを選んでお昼ご飯。

なーんて、言っていると。

一緒に住んでいるのって、手がかかるばかりみたいだけど。

「……ただいま」

仕事が遅くなった時。ドアを開けると明るい部屋は、ちょっとだけ嬉しかったりする。

「おう、お帰り」

「……フン」

それぞれの、挨拶（挨拶らしき、というのもあるが）を受け、上がる室内は、なんだか暖かくて。

「都も飲めよ」

「は？」

何故かテーブルの上に転がる缶ビール。

「何あんたら飲んでる訳？」

「まあ理由はねえ」

「酔っ払いの理屈かよ！」

少し赤らんだ顔で愉快そうに笑う勅使河原さんに、此方は全く普段と変わらない木崎さん。

着替えもそこそこに、引きずり込まれて、ぶち宴会。

全く何やってるのかね、という気分と、ま、いいか、という気分と。くだらない話にゲラゲラ笑いながら時間はあっという間に過ぎて。

すっかりいい気分で転がってる勅使河原さんを踏まないように、窓際で月を見ている木崎さんの横に行った。

「星も出てる？」

「ああ」

木崎さんの手には、何時の間にかお酒ではなくて、普通のお茶。どうやらあまりお酒は好きじゃないみたい。付き合い程度には飲むけれど、という感じがする。

二日酔いで唸る勅使河原さんは見た事あるのだけど（それだって滅多にある事じゃない、ざるなんてもんじゃないくらいに強い）、木崎さんにはそんな様子もない。

「静かだね」

「そうだな」

さつきまで騒がしくしていたのが、嘘みたいに静か。何時もならば、この落差、寂しくなっていたかもしれない。でも。

「不思議だねえ」

「何が、だ？」

「いや……」

言えなかったのは。

この状況にすっかり慣れた——むしろ、彼らがいるのが当たり前になっちゃった、自分の心情。

（2011/3/22）

陽気に誘われて、はありがちです（前書き）

寒さが日毎に緩んできて、そう、あと少しで……

陽気に誘われて、はありがとうございます

「ほら、あそこ見てみて！」

いきなり声を上げた所為か、隣を歩いていた勅使河原さんが、のけぞった。

枝の先に、ちょこんと顔を出した濃いめのピンク。

これはあれでしょう、あれしか考えられない。

桜の蕾。

「桜だよ桜」

「は？」

キョトンとした反応に、驚くのはこっちの番だった。

「知らないの？」

「わかんねえ」

たつぷり3秒は、顔を見合わせて。

「……信じられん」

この国にこの時期にいて、この、なんていうか華やかでつきつきする気分がわからないなんて、そんなつまらない事があるか、という訳で。

その夜。

次の休日は、二人を引っ張り出して、花見、と、私は高らかに宣言したのだった。

「花見？」

木崎さんも同じような反応だった。

「しないもん？」

「……ないな」

「……ないね」

二人の声が重なった。

「それはあまりに人生損してる」

「そこまで言うか」

呆れたように勅使河原さんは頭をかいて。

木崎さんは、付き合いきれぬという顔をして、横を向く。

「せいぜい2週間もあるかどうかなんだよ、花の時期なんて」

援軍なしの状態で、私は一人、花見について力説。

「咲き初めの、いつ開くかな、いつかなって待ち遠しいのと」
指を折って。

「花が咲いて、ああ、何分咲きだ満開だって、眺めて」
またひとつ、指を折って。

「でもって、最後は散るところ！ はらはら散っていくのが綺麗だけれど寂しいような、だけど潔いようになって味わう」

折った指3本を、空中で振って見せた。

「1粒で3度美味しいってね」

「……ふうん」

気圧されたような、勅使河原さんの声。

「なるほど、そのような和歌だったか……見た覚えがある」
ぼそりと木崎さん。

ってか、古典まで読んでいたのかよ、と突っ込みたくなるのを我慢して、花見についての説明を続けた。

「ぶらぶら散歩するのもいいんだけど、中にはお弁当持って行くとか、宴会だとか」

「その話乗った！」

「は？」

ばしんと大きな掌を打ち合わせて、いきなり頷いた勅使河原さんに、言葉を途中で切られた私は、勢いでつんのめりそうになった。

「つまり酒飲んでいいんだろ？」

「ま、まあ……そういう人もいるっていう意味で、ね」

「じゃあ、何も言う事はない、俺、行くぜ花見」

「……」

つまり酒かよ、と此処でも突っ込みたくなるのを必死で我慢しながら、私は木崎さんの顔を見た。どうする？ という目で。

「……フン」

表情は変わらぬまま、だけど、目だけで、木崎さんは笑った。

「まあ、付き合ってやらぬ事もない」

「やったあ！」

「やったな！」

勅使河原さんとハイタッチした後で気が付いた。

なんでこんな事で、しかも一緒に喜んでいるんだ？

まあ、この季節は大好き。一緒に漫ろ歩きして、花を見るのも、きつと悪いものじゃないよね。いや、そう思ってもらえると、いいな。

(2011/3/31)

流れる平穩に戯れ（前書き）

お花見に行ったその夜の出来事

流れる平穩に戯れ

「まったりするのも、悪くないでしょ？」

桜は程よく開いていて。

そこかしこに、可愛らしい蕾もあって、時折、散っているようにも見えるのは、そういう時期が来た訳ではなく、鳥の仕業。

根元の甘い蜜を吸って、残った花をぽとりと落としたものらしい。そんな、落とされた花から、なるべく色が綺麗そうなのを選んで、拾い集めて家に戻ってから、ガラスの器に水を張り、浮かべてテーブルの真ん中に置いてみた。

これも悪くない。

「そういうところは、女の子だなあ」

「どういう意味よ」

「べつに……ああ、俺ちよつと横になるわ」

ごろんと、寝転がった勅使河原さんは、あつという間に寝息を立てていた。

「はやっ」

「……飲みすぎぞ」

「なるほど」

溜息交じりの木崎さんの声に頷いて、それでも一応気になったので、そこらにあった上掛けを掴むと、勅使河原さんにかけて。

それから私も、木崎さんの座る向かいに腰を下ろした。

「そういう木崎さんだつて、結構飲んでなかった？」

「こやつと一緒にするな」

首をしゃくって、勅使河原さんの方を示して、不機嫌そうに木崎さんは言う。

この二人、見ていて面白い。

勅使河原さんの方は、マブダチって勢いだし、木崎さんは大抵迷惑そうにしている。

でも、気が合わないって訳でもなくて。

多分、お互いをきちんと理解しているんだろうな。

性格を把握しているというか、相手の踏み込んでいいところが何処までなのかをわかっていて——だからこそ、勅使河原さんは、本当に木崎さんを激怒させるような事はしないし、木崎さんも口では色々言うけれど、勅使河原さんを信用しているように見える——必要と思ったら手を出す。

その加減が、絶妙なんだ。

だからなんだろうな。

喧嘩していても、安心して、放っておけるといっつか。

笑って見ていられる。

「何を緩んだ顔をしてる」

「へ？」

気が付くと、木崎さんがじっとこちらを見ていた。

「笑ってた？ 私」

「へらへらとな」

「それは余計だよ」

全く、乙女の顔にへらへらって……口が悪い事この上ない。

「流れる平穩に戯れる毎日がいいなって思ってた」

「は？」

訳が分からない、という顔をして。

それから、少し難しい表情になって、木崎さんが手を伸ばしてきた。

「な、何！？」

「熱はないようだな」

ひんやりとした掌が、すっと額に当てられる。

「あ……」

気が付けば目を閉じていた。
なんだろう。

心地よい、温度も感触も。

すつと離れる手が、惜しいと思わず考えてしまつくらいには。

「どうした？」

はつと我に返った。

「何でもないよ」

「今度はぼんやりとして……やはり調子が悪いのではないか？」

「違つての！ 大体なんで具合悪いとかいう発想になる訳？」

「発言が耳慣れぬ」

「どういう意味だよ」

全く、二人揃つて。

人をなんだと思つてる。

溜息をついた。

「君ら二人は、私をなんだと思つてるんだろうね」

「あやつの考えは知らぬが」

また首をしゃくつて、木崎さんは、其処で寝ている勅使河原さんを
示して。

「私のなら聞かせる事はできるが」

「うーん、それは」

聞いてみたいような、聞いてみたくないような。

聞いたら最後、口よりも先に手が出てしまいそうな。

「あらかじめ聞いておきたいんだけど」

「何ぞ？」

「客観的に見て、その内容って、怒られそう？ それとも、へえー
って納得されそう？」

「ふむ」

腕組みをして考え込む木崎さん。

「私は納得しているが、そなたも同じとは限らぬな」

「そんなあいまいなんじゃなくてさ」

「試しに聞いてみればよからう」

「ううむ」

今度は私が腕組みをする番だった。

(2011/4/7)

しど、しどりと雨は降る（前書き）

同居人がいる風景が当たり前になってしまった、そんなある日。

しと、しとりと雨は降る

どんよりとした薄暗い空。

座ったまま、木崎さんが窓を見て、溜息をついた。

「暗い空だな」

「こんなの雨のうちにも入りませんよ、もう1か月もすれば梅雨なんだから」

梅雨が来たら、ずっとこんな空模様だ。

そして梅雨が明けたら夏が来る。蒸し暑くて、かんかん照りで、ばててしまいそうな日差しが。

そう続けると、フン、と、面白くなさそうに鼻を鳴らして。

本に目を落としてしまったその人を置いて、それじゃあ行ってきた、と私は其処に立てかけてあった傘を手にした。

木崎さんと違って——それは、お天気の日は清々しくていいと思うが——雨は何でも嫌という訳じゃない。

こんな風に出かける時には、うっとおしい事もあるかもしれないけど。

例えば、休日で、何も急ぎの事がない、そんな日なら。

静かな雨音でも聞きながらぼうつと過ごすつてのも、悪くないと思う。

「とはいうものの……」

切れる気配のないどんよりと分厚い灰色を見上げて、木崎さんにはああ言ったものの、流石に溜息が出た。

本当ならば、今時分って、からりと晴れて、爽やかな天候の筈なのに、どうした訳か、数日、雨模様がが続いている。

釣られて暗くなる気分を何とかしようと、手持ちの中で一番明るい色の傘を選んだのに。

ぱしゃぱしゃという、走るような音に気が付いて、深く差していた

傘を、ちよつと上げる。

「あら？」

「よう」

バイト帰り——夜勤が混じっているのだ——の勅使河原さんだった。

「これから出勤か？」

「うん、そつちは帰りだね」

「見ての通りだよ……ああ、木崎、今、家にいるか？」

「今日は一日いるような事言っていたけど……？」

ちよつと、妙な気がした。

勅使河原さんは、何気なく聞いてきたけれど、あまりにさりげないその声に、逆にあれ？　と思つたのだ。

勅使河原さんが夜に出歩くのはそんなに珍しい事じゃない。仕事の時もあれば、何やらぶらぶらと外出つて事もある。そんな彼と、こうしてすれ違ふ事も一度や二度ではないし、顔を合わせれば話ぐらいはするけれど。

わざわざ、木崎さんがいるか、なんて、聞いてきたのは初めてだと思ふ。

つまり、必ず捕まえない用事があるつて事じゃないだろうか。

それが何なのかはわからないけれど。

「何かあるの？」

「いや、そういう訳じゃないさ」

何か、隠してる。

胸の中で、ざわりと、そう、音がした。

でも、今それを追求するだけの時間も余裕もなかった。

また、ぱしゃぱしゃと、派手な音を立てながら、走っていく後姿を見送る。

曇天の憂鬱さに、ざわざわとする、不快な胸騒ぎが入り混じった。

雨は翌日になつても止まなかった。その次の日も。

まるで、もう梅雨が来てしまったのかと思うくらいに、飽きる事無

く。

木崎さんと勅使河原さんが、何を話したのかはわからないまま。

木崎さんは家にいて、ごく普通に過ごしていたけれど、妙な緊張感が漂っていて、声をかけにくい。

勅使河原さんの方は、慌しく出入りをしていて、此方の方が事情を聞けそうなのに、捕まえる事が出来ない。

そんなもやもやを抱えている所為か、仕事場についても、ぼんやりとしているものだから、このところ、細かいミスが目立つ。

何とか、挽回できる程度だからいいものの、かなりまずい状態だ。

どうかしたのかと、隣の席から心配そうに聞かれても、自分でもわからないものを持て余しているのだから、どう返事をしていいかわからない。

体調がよくないらしいと勝手に推測されて、拳句に、幸か不幸か、残業からも解放されてしまい。

少しだけ早い時間帯の、帰り道を歩く。

淡い色の布地から、滴り落ちる滴は、一定のリズム。

ぽた、ぽたり。

しと、しとり。

傘を打つ雨音と、落ちてゆく水滴は、色のない音楽を奏でている。

「……結城」

そんな、世界を破ったのは。

透明なビニール傘を手に、佇む人だった。

「木崎さん？」

また、心の隅がざわりと音を立てた。

いよいよおかしい。

「何、してるの？」

「……何でもない」

そう言いながら、木崎さんは、ずっと私の横に並ぶと、歩き出す。

「どうかしたの？」

「どうもせぬ」

信じる訳がない。

だって。

だって、だって。

同居を始めて。これまで一度だって。

こんな風に、迎えに来てくれた事なんて、ない。

(2011/4/20)

しど、しどりと雨は降る（後書き）

ちよっと思わせぶりなところで切ってしまっすみませんー

ぼた、ぼたりと滴は落ちる（前書き）

雨の降る中、聞きたい事は、喉まで出かかっているけれど。

ぼた、ぼたりと滴は落ちる

それきり、振り返る事もなく歩き出した木崎さんと。
後ろについて歩く私と。

相変わらず、傘と雨が生み出す、色のない音楽。それに混じった、
二人分の足音。

全てが水に濡れている。

そんな中を、会話もないまま、ただ歩き続けて。

「木崎、さん？」

あと少しで、私達の暮らす建物の前。

重たい沈黙に耐えきれなくなつて、思わず、その名を呼んだ。

「何ぞ」

振り返つた木崎さんは。

何時もと変わらない顔で、声で。

少しだけ首を傾げて此方を見ている。

「あ、あのね」

「どうした？」

あまりにも、その人の反応が普通すぎて、聞きたかつた筈の内容が、
バラバラ零れ落ちた。

——何かあつたの？

——どうかしたの？

——何故、今日に限って、帰り道にいるの？

言葉が、形を失って。

掌をすり抜けて消えていく。

「その……」

佇んだ彼は、黙って逡巡する私を見つめている。

穏やかで優しい色の瞳が、かえって、私の中にある、ざわざわとし

た得体のしれない不安を煽るのに。
でも、その瞳があまりに優しいから、ずっと見つめていてほしい、
なんて。

自分でも何を考えているのかわからなくなってしまふ。

「あのさ、誕生日って知ってる？」
「は？」

あまりに唐突な話題に、流石の木崎さんも、驚いたように目を見開いた。

「生まれた日、という意味か？」

「うん、お祝いをするんだけど、そういうのって、魔界にはないの？」

「……特に考えた事もない」

「ふうん」

魔界自体にそんな風習がないのか、それとも、彼自身がそんな事と関係ない、という意味か。

「ちょっとつまらないね、お誕生日だって言うと、お店とかでもおめでとうって何かちよつとしたサービスとかしてもらえたり、友達に祝ってもらえたり、欲しかったものをもらえたりするんだよ」

「ほう」

それで、と木崎さんは先を促す。

「その誕生日とやらが、今、話題になる理由はなんだ？」

「その、ですね」

ちよつと照れ笑いをした。

「その誕生日が、来月、なんですよ、私」

「ふむ」

「一つ歳を取る訳ですけど、まあいくつになっても嬉しいというか、
そんな訳でね……その、木崎さんに、ちよつとくらいおめでとうつ
て言って欲しいかな、なんて……」

あ。

と慌てて付け足した。

「その、勅使河原さんも一緒に、さ」

くくく、と木崎さんが喉を鳴らした。

笑ってる？

「ずいぶんささやかな願い事だな」

「悪い？」

「いや」

楽しげな顔で、首を振って。

「悪くはない、そうだな、いいだろう」

「いいの？」

こつちの方が驚いた声を出してしまつて、怪訝そうに見られた。

「何を今更、言いだしたのはそなただろうに」

「そうなんだけどさ、でも」

そんなにあつさりOKもらえろと思わなかった、そう言つと、さらにおかしそうに体を揺すつて、木崎さんは。

「そなたの願い叶えてやれば、我が願いの成就に近づく、それだけの事」

「……はあ」

あー、あれですね。

私が木崎さんに落ちれば、自分は無事に魔王就任って訳ですね。

「そんな簡単に、話なんて進みませんよーだ」

「フン、全くもって見る目がない、節穴だな」

「何それ、自分で自分がお勧めだなんて言うんだ、自信過剰」

「優れてる者が、己を優れていると言つて何が悪い」

「普通はそういうの、嫌われると思うけど」

顔を見合わせて、どちらからともなく、噴出した。

途端に、互いの傘から、ぽた、ぽたりと水滴が落ちて、音を立てる。

「何日だ？」

「へ？」

「そなたの誕生日とやら、よ」

「ああ」

日付を告げると、木崎さんは頷いて。

「結城、手を出せ」

「手？」

言われて、おずおずと差し出した手に、彼がそつと何かを乗せた。

「綺麗……これ、何？」

石なのだろうけど、綺麗な赤だった。中心でまるで燃えているかの
ように、光が揺らめいている。

「宝石？」

「ちよつと違うが……まあ説明してもわかるまい、大事に持ってい
る」

「これを？」

「約定の証だ」

「えと、誕生日おめでとうって言うてくれるって約束の印って事？」

「わかったな」

くると、木崎さんは背を向ける。

「……木崎さん？」

振り返りもせず、彼は。

「しばし、留守にする」

(2011/05/08)

隠し事ってのは僅かなほころびからばれる（前書き）

そんな訳で、日常が戻ってきた。

隠し事ってのは僅かなほころびからばれる

たった数か月。

されど数か月。

別に、元の生活に戻ったに過ぎない。

好き勝手にやっていた割に、妙なところで律儀というのか。私の同居人達は、自分達のいた痕跡を全く残していなかった。荷物はおろか、髪の毛一つ残さぬような徹底ぶりに、どんな顔して掃除していたんだろうとか、そんなどうでもいい事が思い浮かんで、笑いが止まらなかったくらいには。

魔力は使わないって言っていたけれど、これだけ何も残らないって普通じゃ考えられない。

本当は、何かの術でも使って、時間だけ遡ったんじゃないかって、疑ってしまうくらいで。窓の外を見て、それが馬鹿げた考えだと、初めて気が付く。

結局、留守にするとは言われたけど、何処に行くのか、何をしに行くのか、彼らの事情は何も分からないまま。

私の手の上に乗る、この赤い石だけが残っていた。

こつん、と音がした。

はつと振り返ると、壁からよきつと生えた手。

普通ならば、何処のホラーかと騒ぎになるところだが、嬉々として私は立ち上がった。

「勅使河原さん！」

「よっ」

部屋に入ってくるなり、急いでいるから、と、何やらごそごそ部屋の片隅でやっていた勅使河原さんは——綺麗に片づけたかと思えば、

戸棚の後ろだとかなんだとか、そんなところに私物を隠していたのか――布包みを抱えてこっちに帰ってくると、で、と促すように私の顔を見た。

「何が？」

「いや、調子はどうかなって」

「相変わらずですが」

「ふうん」

ずっと、勅使河原さんが目を細めた。何かを探るように彼方此方を見ている。別に対して変わり映えもしない部屋だし、配置も変わってないのに。

何だろうと思っていれば。

「へえ」

ほつと息を吐いた。感嘆の音に聞こえて、首を傾げる。

「見事なくらい変わってねえ……あ？」

「へ？」

勅使河原さんは、匂いを嗅ぐ時のように鼻をうごめかすと、ぐいつと指を突き付けた。

「都、もしかして木崎から何か受け取ったりしてるんじゃないかねえか？」

「あ……これの事？」

結局、何時も持ち歩いてしまっている赤い石を取り出す。

「どうかした？」

「まじかよ」

目を丸くした彼は、やがて、ぶつと噴きだした。

「なるほどなあ、それなら都が変わりなく安全なのが納得いくわ」

「安全？」

「いや、こつちの話」

急ぐとはいっても、何もないのもなんだしと、出した麦茶をぐつと飲んで、ごまかすように手を振って、勅使河原さんは話を続ける。

「それ見たら、色々と腑に落ちたわ……お前それ、絶対失くすなよ」

「それ、木崎さんにも言われた」

「だろうな、失くすと大事おおいじだもんな」

「そんなすごいもんなの？」

「話には聞いてたけど初めて見るな、俺は」

「……超レア？」

「そんなところだな」

ハハハツと笑って。

勅使河原さんが、私の肩をバシッと叩こうとした時。

びきつという、聞いた事のない音がした。

「いつてえ……」

「え？」

私の方は何ともないけれど、飛び上がるようにして手を放した勅使河原さんが、眉を顰め、指先をふーっと吹いた。まるで冷ますかのように。

「な、何事！？」

「あの野郎、俺は敵じゃねえつつの！ 戻ったらただじゃ置かねえ」

不機嫌そうにそう呟くと。

「じゃあそろそろ行くわ」

そう言って、勅使河原さんは、立ち上がった。

「もう行くの？」

「ああ、まだちょいとかかるんだわ……今日は忘れ物探しがてら、都の顔見に来ただけで」

「……そう」

悪いな、と片手をあげて、壁の方に歩き出した勅使河原さんが、ふつと足を止めて振り返る。

「俺らない間、用心しろよ、一人暮らしなんだから」

そもそも、彼らが来る前はずっと一人暮らしだったんだけどね。でも、勅使河原さんの好意は嬉しかったので、素直に頷いた。

「はいはい」

「その赤いの、必ず持つて歩け」

「つまり、お守りみたいなもん？」

「まあそう思つててくれてもいいな……詳しくは木崎から聞けよ」

どうやら、よほどの代物らしい、この赤い石は。

よくわからなかったけど、そもそも木崎さんから渡された訳だし、
勅使河原さんは、詳しく説明する気はなさそうだし。なさそうって
いうより、触れたくなさそうってというのが正しいかな。

「うん、そうする」

遅くとも、誕生日には、聞けるだろうから。

(2011/5/19)

ぼたん、ぼたと音がするのは、お約束（前書き）

そうして月が替わると、例のあの日がやってくる。

ぼたん、ぼたと音がするのは、お約束

静まり返っていた。

当たり前だ、多分時刻は、深更つてやつ。

今日に限って、照明の豆球すら消してしまったので、部屋の中は暗い。

さつきまで眠っていてぱちりと開いた目なのだから、暗さには慣れているが、何もかも、ブルーグレイに染まっている状態は、まるで水底にいるかのようだ。

カーテンの隙間から僅かに差し込む光だけが、頼りな、深い……

ところで、何故、目が覚めたのだろう。

考えながら両腕を布団から出して、顔に掌を当てていたら気が付いた。

喉が渴いている。

なるほどと、妙な納得をしながら、立ち上がると、うつすらと見えているのを幸い、電気は付けずに半分手探りでコップと、冷蔵庫の中の水のペットボトルを掴みだす。

冷蔵庫が開いた時だけ、眩しくて目が細くなった。

よく冷えている水は、きいんと、頭まで突き抜ける。

「うげえ」

思わず呻いて、それでももう一杯注いでまた飲み干して。シンクにコップを置いた後、少し考えて、蛇口を捻った。

大した手間じゃない。

洗っておくか。

洗ったコップを伏せると、まだ温みのある筈の布団へと戻る。

思った通り。

ほんのりとあたたかい毛布に、くしゅと顔を埋めた時だった。

ぼたん。

ぼたん。

もしかして、さっき洗った後、きちんと水道閉めなかったかな、とか。

トイレか何かで水漏れか、とか。

そんなに大きなものでもないのに、はつきりと聞こえてくる音に、折角布団に戻ったのにと顔を顰め、とはいえ、水らしいその音を、そのままにする訳にもいかず——だって水道料金が心配になる——立ち上がった時だった。

ゆらりと、人影。

心臓が跳ね上がる音を立てた。

息を飲む。

次いで。

「ひっ！」

あげかけた声は、掌の中に消えた。

自分のものじゃない。

「ふごふが」

「夜半に叫ぶでないわ」

耳元でしたのは、ずっと背中に回ったその人の、落ち着き払った声だった。叫びかけた私の口を塞いでいるのは、勿論相手の掌である。

「そっちこそ、夜半に訪問ってどうなのよ」

そんな反論ができたのは、しばらくしてから的事。

ドキドキが酷くて、息切れがしてて、整うまでに時間がかかった。布団にべたりと座り込んで深呼吸。そんな私を、跪くような形で、面白そうに見下ろしている涼しげな目が、やたらむかつくものの、どうする事も出来ない。

「すまぬな」

絶対悪いなんて思っていない、棒読みに近い口調。

「今しか時間が取れぬ故」

「今しか……？　って何時なのよ今」

ずっと差し出された腕時計は、蛍光塗料で針が光っている。あ、数字も見えるな、これなら。

「日付が変わってる」

「だな」

しれっと答えるけど、一応こちらら、妙齡の女性なのだ。

幾ら、しばらく同居していたからって、起きていたからまだいいよ
うなものの、寝ていたらどうする気だったんだとか、なんか追求する
気も失せてきたな。

針が、かちり、と動いた。

「……今日だったな」

「？」

ぼとりと、降ってきた言葉に、耳を疑い、次いで、ああそうか、と
納得する。

おめでとう、とただそれだけ。

でも、約束はそれだった。

「そうだね、今日だよ」

私の誕生日が来た。

水の底のような世界で、薄く差し込んでいる街灯の朧な光を頼りに
その顔を見つめる。
相変わらず整った涼しげな容貌。

青褪めているのかと思うような白い色は、元々の白さもあるけど、あたりが暗い所為だろう。

引き結ばれていた薄い唇も、この状態では色彩を失っている。瞳だけが、きらりと、光を反射していた。

その目を見ると、時間が止まってしまふ。

幾らでも見飽きない、まるで宝玉のような。

空気すら止まってしまったかのような、静けさの中で。

ゆらりと気配が動く。

相手の目を見つめたまま、口を開いた。

「行くのね」

疑問形ではない、確定しているものとして。

「ああ」

返ってくるのは、肯定。

近況だのこの先の事だの、何もない。

ただそれだけの会話で。

触れもせず、触れられもせず。

なのに。

歩き去る木崎さんの背が、ブルーグレイの世界の中に沈むように消えて行った後も。

水底の世界の中で、私は一人、幸福感を抱えていた。

「……ありがとう」

(2 0 1 1 / 6 / 3)

後からするから、後悔（前書き）

一人暮らしが戻ってみると、落ち着いて考える余裕が出てきた。

後からするから、後悔

日常は、恙なく、変わりなく。

まあ、食費とかは減っただろう。それと、会話の数。

帰ってくれば、相手がいないのだから、圧倒的に口数が減る。

深夜の訪問以来、木崎さんはおるか、勅使河原さんからのコンタクトも一切なく、私の部屋は酷く静かだった。

二人とも何も言わなかったけど、留守にするって事は行く先は多分、魔界なのだろうし、二人揃って、普段なら戻れない筈の道に戻っているって事は、かなりの緊急事態——例えば世界の存続にかかわるような、そのくらい大きな何か——が起こっているのだろうというのも予測はついた。

二人が教えない理由は、そう、例えば、心配をさせないように、か。それとも、部外者なので口にする必要がない——もっと積極的に、言えない、そのあたりか。
其処まで考えて。

つきん、と痛みが走った。

「んっ」

思わず押さえたのは胸だけど、別に怪我をしているとか、病気をしているとかそういう訳じゃない。

わかってる。

ずっと認めないで来たけど。

でも、ずっと前から、わかってた。

あの人が——あの人達が。

好き、なのだと。

部外者、なんて思っただけで、痛い、そのくらいに。

好きにも、種類があつて、likeとloveじゃ、温度も違う。

どの種類の好きなのかと問われると、正直自分でもわからない。友情というか、家族愛的な、好きなのかな、とは思うが、それだけと言いつ切るには、何かがおさまらない。

あやふやで、もやもやとしている自分の気持ち。

もう一度彼らの顔を見たら、答えは出るんだろうか。

ただ、一つだけ。

このまま、彼らとの接点が一切無くなったとしたら。苦しい。

私の中の何かが——それは、名前はわからないけれど、私という人間を作っている大事な一つで、欠けたらきつと、私は私じゃなくなる——消えてしまう。

そんな、確かな予感があった。

そんな事言ったら。

木崎さんは、きつとあの無表情で冷ややかな目をして、「フン」って笑うんだろう。

勅使河原さんは、「なんだあ、恋か？」って豪快に笑って、違ーう！と、その背中を思いつきり叩いて。そうすると、木崎さんが不機嫌になる。

「喧しい」って。

ああ。

本当に、そんな声が、聞こえてくるようで。

握りしめたのは、木崎さんから受けとった、あの、赤の石。

不思議と冷たくなって、かといって、熱い訳でもなく。肌に馴染むような温度のそれは、今日もゆらゆらと光が中で遊んでいる。

「出来ぬ事は言わぬ」

ふっと、記憶の中から蘇った声。

やっぱり三人で話していた時だった。

何でそんな話になったのか、遅刻についてから始まって、約束する

意味とかいう、妙に高尚な話題になった。

その時、木崎さんがそう言ったのだ。

「おー、自信满满」

くすつと笑った私の頭をぴしつと指先で弾いて、フン、と顔を背けた木崎さんに、勅使河原さんが。

「まあ、そうだよな」

うんうん、と頷いた。

「守れねえ約束なんて、しないに越した事はない」

「まあねえ、だけど、不測の事態ってあるじゃないの」

「それくらい見通せぬでどうする」

勅使河原さんと顔を見合わせた。

自信满满どころか、不遜の域だね、これは。そう目で話しかける。そうだなと、相手の目が頷いていた。

「それにさ、守れないとしてもだね、約束が、励みになるっていうか、あるだけでいいってケースもあるじゃない？」

それだけで生きていける事だってある、そう言いたかったんだけど。

「好かぬ」

木崎さんが頭を振った。

「策としての口約束なら幾らでもするが……そうではない場合、そのような言葉は口にせぬわ」

「木崎の場合は、策略だつて人を騙すもんな」

「人聞きの悪い、嘘は言っておらぬ」

真実も言つてはおらぬが、と木崎さんは、口元を歪めた。

「うつわあ、悪党」

笑いが止まらないのは、きっと、お酒が入っている所為だ。そう、単なる酒の席の雑談。

「必要な場合は、という意味ぞ」

「なるほど、必要なら悪人でも何でもなる訳ね」

「……ああ」

頷いた木崎さんの手にあつたグラスの中身が、一気に空になった。

見据えるという表現がふさわしい視線で、此方を見る。
ああ、この目を何処かで見た事がある。

あれは、年末だっただろうか。勅使河原さんが来た日。

「そなたとの、此処での暮らし、悪くない、という事よ……」そう
言つて、私を見た時、木崎さんはこんな顔をしていた。
等と思つていたら、目の前の形のいい唇が、開いた。

「私とて、騙したくない相手もいる、という事ぞ」

なんだか疲れた声だった。

木崎さんらしくない、と思える声だった。

私はあの時、なんて返しただろうか。

難儀だねえとかなんとか、そう言つて、木崎さんの視線を外して、
自分をグラスを干した気がする。

勅使河原さんは……そう、勅使河原さんは、珍しく何も言わないで
手酌で自分のグラスを満たしてた。

思い出した場面が、ざざ、と頭の中を流れる。

口の中が苦い。後から悔やんだところで、何も変えられないという
のは、なんてまずい味がするんだろう。

何を言つたらいいのかはわからないけど、でもわかる。

あの場で言つべき言葉は、そんなものじゃなかった。何か、あの人
に届けなくちゃいけない気持ちがあった。そんな気がして、それが
苛むので、口の中の味は、ますます苦くなつていく。

せめてどうして。

この間来てくれた時に、もう少し何か言えなかったのだろう。
次が、もしも次があるのなら。

出来ない約束はしない。
だとしたら。

先日の訪問で。

またね、とか次を予想させる言葉を何も言わなかった。

かといって、これで最後だという言葉もなかった。

あの人との約束は、只二つ。

一つは、誕生日におめでとうと言ってくれる事。

もう一つは。

大事に持っているとされた石が、またゆらゆらと、光った。

「ねえ」

返事はないとわかっていても、口にせずにはいらなかった。

「大事に持ってるよ、持っていたら」

——私達の繋がりは、切れない、そう思っている、いいのかな——

(2011/6/28)

心の準備ってやっぱり欲しいものです（前書き）

……そうして、何処か不在を意識しながら過ごしていた、ある日。

心の準備ってやっぱり欲しいものです

ごく普通に、仕事して家に戻って、簡単な食事を済ませて。

別に面白くもないけど、静かな部屋も寂しい気がして、テレビ等つけていて。

そう。

寝る前までは、普通に自分の部屋にいた。

確かに、眠りに落ちる寸前、ちらりと、木崎さんや勅使河原さんの顔を思い浮かべはしたが、それは何というか、年中行事というか、折に触れて気になってはいる事だから、だろう。

そう、取り立てて変わらぬ一日を過ごしていた筈だったのである。

目覚めるとまず、白い、薄い靄みたいなものが目に入った。

違和感を感じて目を擦り、それでも視界が変わらないとなつて、慌てて体を起こすと、ぎしつとやたらいいスプリングの音。

こんな音がするもの、部屋に置いていたっけ？

と、よくよく天井を見上げてみると。

「此処、何処？」

それは、天蓋のついた寝台だった。

靄に見えたのは、下がっている布地だったのである。

そして、敷き布団もかけ布団も、見事にフカフカ。最高の感触だった。

「目覚めたか？」

聞き覚えのある声に顔を上げれば、やはり。

「木崎さん……」

其処に立っていたのは、木崎さんだった。

彼は、最初に出会った、不思議な装束だった。

ただし、前回は彼が小さかった為、何処のコスプレ人形か？ とい

う感じだったのが、等身大ともなると、これがまた、妙に威厳があったりする。

少なくとも、笑う気にはなれなかった。というよりも、怖い方が、割合的に多いかもしれない。

先のとがった帽子のような、印象的な兜は、今は脇に置かれて、彼は、ごわごわとした袖の先、黒い手袋に覆われた手を、すつと持ち上げ、前髪を煩わしそうにかきあげると、私を見下ろした。

「何をしにきた？」

「何って……」

そもそも、何で此処に、木崎さんといえるのか、こっちが聞きたいくらいなんです。

どうしたものかと思っていると、ふっと、彼の視線が動いた。

つられて、私もそちらを見る……って、見ているの、私の右手じゃないか。

「そんなに染まったか」

気が付くと、例の赤の石が握られている。

そう言えば、寝る前に持っていたような記憶が……どうやらそのまま寝ていたらしい。

でも、染まる？

どういう意味？

「波長が合ってきたと見える」

「日本語でいいから……じゃなかった、もう少しわかりやすく」

そう言っと、木崎さんは、何故わからないのかと、幾分苛立ったような息を吐いた。

切れ長な目が鋭く睨んでいる。

とはいえ、こっちもそんな態度には結構慣れっこである。そんなくらいでは引き下らない。じっと見つめていると、諦めたように口を開いた。

「その石を持って、我らの事を考えはしなかったか？」

「うーんと、寝る前に、ああ二人ともどうしているかなって思い浮

かべた、気が、する」

「それぞ」

木崎さんが言うには、寝ているときは意識が解放されているので、願望がダイレクトに伝わる、ものらしい。私と波長が合い始めた石が、その願望を感じとり、作用した結果、私は魔界に迷い込んだ、という事になる、らしい。

やだなあ、恋焦がれてるみたいじゃないのそれって。

どうしてるかなって、思い浮かべただけなんだってば……って、ちよつと待つて。

「え？ 此処って魔界？」

「……そこに驚いている場合か？」

いかん、うっかり木崎さんに突っ込まれた。

話を戻そうと、顔を引き締める。

「参る……」

木崎さんは空を仰いだ。

「強い力がある故に、守りとなるが、副作用もやはり強いものよ」

「だからって、都がそれ持っていないのも問題だろ」

第三者の声に振り返った私は。

「勅使河原さん！」

相手の名を呼んだ。

「よっ、久しぶりだな」

勅使河原さんは、人懐っこい笑顔で、するりと隣までやってきた。重たげな、じやり、という音をさせながら。

勅使河原さんの格好は、これは、初めて見るものだった。

肩のところで断ち切られたＴシャツのような上衣は、彼の筋肉質な腕を最大限に引き立て、細身の動きやすそうなパンツは、膝下からはがっちりした鋳鉄のブーツに覆われている。

腰の辺りに、じやらじやら重そうに下がる銀色の鎖は、先端に分銅のような重りがついていて、振り回したらさぞかし破壊力がありそうだ。

どうやら単なるアクセサリーではないらしい。

そういえば、木崎さんの腰にも、皮のようなベルトに差し込まれ、細長い——どうみても剣らしき——ものが下がっている。

そうか、二人とも、これは非常時の姿なのか。

勅使河原さんの鎖に、やっとその事に思い当たった。

「わかつている」

木崎さんは首を降る。

「守りなくば、此方も背後を取られたも同然」

「だよな」

「あ……の……」

なんだかすぐく今更な質問だが、機会を逃すとまた聞けなくなる気がして、私は二人の間に口をはさんだ。

「そもそも、この石って何でもってなきやいけないの？」

返ってきたのは、沈黙。

「ちよつと、説明も何もなく、思わせぶりな事ばかり言われても、こつちも困るんだけど」

「まあ、そうだよなあ」

微妙な顔になったのは、勅使河原さん。

「木崎、全く何にも話してないのか？」

「必要ない」

木崎さんの答えの簡素な事。

「そもそも、いらぬ情報を入れては、不必要な事まで気にかかる」「ちよつと待て」

私は額を抑えて、木崎さんの言葉を遮った。

「何も知らない方が、気になってしょうがないじゃないの」「……？」

「え？ そんなわかりにくい？」

「そのような心境が理解できぬ、自分に関係ないもの、気にする事もなかるう」

「そんな風に割り切れないものなの！」

と、目を丸くして、驚いた表情で、木崎さんが黙った。

驚くところですか此処？

よくある事だね？ という視線を勅使河原さんに向けると、やれやれという顔で、首を振っていた。
そして。

「まあ、あれだ」

にやりと、何故か、保護者的な包み込むような笑顔になった。嫌な予感がする、と思った瞬間。

「考えてる以上に、入れ込んでたんだな、お姫さん」
やっぱり。

それって何、木崎さんが気になってしょうがないって、そういう意味にとられているってそういう事なんですよ。いや、気になるのは確かにそうなんだけど、そんなにやにやされて言われるような意味合いじゃないと思う。
多分。

「ちがーう！」

「まあまあ、隠す事でもねえよ」

「隠してるんじゃないくて、そもそも、違うから」

「何をじゃれている」

呆れた息を吐いた木崎さん。それどころではないだろうと、窘めるようなその口調からいっても。

木崎さんは、今の会話の意味、おそらくわかっていない。
その事が、救いなのか。
それとも。

(2011/8/22)

(仮)と(候補)ってどっちが上？(前書き)

迷い込んでしまった先、彼らが何をしているのかやっとな説明を聞く機会が出来た。

（仮）と（候補）ってどっちが上？

勅使河原さんはにやにやしたまま。

私は叫びすぎてぜいぜいと息を切らしながら。

そして、木崎さんだけが無表情で。

「……で？」

説明を乞おうと、深呼吸をしてから、私は口を開いた。

「とにかく洗いざらい、吐いてくれない？」

「何処から話したのか」

木崎さんが顎に手を当て、考え込む風になった。

「最初からお願い、でないと訳わかんないんだから」

「最初……となると」

にやにや笑ったままの勅使河原さんが口を挟む。

「そもそもの起こりって奴だろ？」

「ならば、ざっと数万年前の、最初にこの世界が出来た時からとなるが……」

「待て」

慌てて止める。

「その、世界が出来た歴史っての話さないと始まらない訳？」

「……理解したいのであれば」

本当か、というじと目を向ければ、必死で爆笑をこらえようとしている勅使河原さん。こんなところでそれ以上笑いを求めなくていいから。

「……手伝わないと、張り倒す」

ぼそつと耳元で呟いてやる。

木崎さんが不審そうに私達を見ているけど、とりあえず今は無視。

「嘘は言ってねえよ」

「でもさ、限度つてものがあるでしょ、手短にとか、端折つてとか」
其処の生き物にわかりやすく通訳しろと迫れば、俺は木崎の通訳じやねえとかなんとか、やっぱ笑いをこらえながら勅使河原さんはぶつぶつと言つて。

ゆつくり木崎さんに向き直つた。

「とりあえず大筋がわかりやいいつていうから、俺が説明してもいいだろ？」

「……構わぬ」

構わないと言いながら、何処か拗ねてるようにも見える木崎さんは、実は自分が喋りたかつたのかもしれない、等と、埒もない事が思い浮かんで。

何だか可哀想？

はつとして、首を振る。

長々と歴史を学ぶ余裕なんて勿論ない訳で。

勅使河原さんが話してくれたのは、ここ最近の、きな臭い噂——例えば、何処其処で武器が買われている、だとか、何処其処の街の警戒が厳しくなった、だとか——を集めているうちに、彼らが掴んでしまった情報だった。

「反乱つて事？」

「手っ取り早く言えばそうだ」

魔界は、歴史的にも、色々な種族や家が複雑に絡み合う環境らしい。争いもその過程で幾つもあつて、その結果、現在、頂点に立つのが魔王、という訳だけど、だからといって素直に従う者ばかり、ではない、という事だ。何処の世界も一緒だね。

「知ってしまった以上、放置はできぬ」

木崎さんは、溜め息混じりにそう言つた。

「俺らは、それでも魔王に忠誠誓つてる身だしな」

勅使河原さんもうんうんと頷く。

「故に、暫定的に魔王としてだな、討伐を指揮しておるところよ」

「は？　だつて試験終わってないって」

首を傾げた私に、可哀想なものでも見る目で、木崎さんは続けた。

「無論、事が落ち着けば、再開だが、今は悠長にしておれぬ」

別に、試験中止かなんて、一言も言っていない。だけど、ならそのま
ま、魔王さんになつちやえば話早いのに……

「魔王（仮）なんだわ」

勅使河原さんが、ぼそつと口を挟んだ。

「（仮）……」

候補と仮、どっちがえらいんだろう。

とはいえ、そもそも候補も木崎さんしかいないらしい。試験で、木
崎さん向いてないって判断されたら（そんな事恐ろしくつてとても
じゃないけど本人前に口にはできないけど）どうなるんだこの国。
あ、そもそも今、魔王っている状態だからそのまま続けばそれでい
いのか。

ん？

つてか、現在の魔王さんはどうしているんだろう？

その疑問には、木崎さんが答えてくれた。

「最後の砦故、現在の魔王には、誰も知らぬ場所で潜んでもらって
おるわ」

「隠れてるの？」

「まあな、頭やられちゃ終わりだから」

勅使河原さんは渋い顔。

どうやら、現在の作戦をよく思っていない様子だ。

……作戦？

それって、つまり。

「それってさ、（仮）じゃなくて、影武者とかそついう類じゃない
？」

「その解釈でも構わぬ」

つまりは、身代わりだと、そう言ってると言っのに、木崎さん本人は動じた風もない。しれっと肯定した。

まあ当たり前か、そのつもりでやってるんだろうから。だけど。

「危なく、ないの？」

「多少のリスクはやむを得ん」

「で、でも」

「これが最上だ」

他のどの方法よりも、いいと、そう言われてしまえば。

危険だ、何も自分が表に立たなくても、もう少し何か方法が。

そんな言葉は一切、役に立たない。

そもそも、この場に絡む必要のない私に、彼らのする事に何か言える筈も無くて。

只々、黙って木崎さんを見ているだけ。

彼もまた、黙って此方を見ている。姿は見えないけど、後ろの方にいるらしい勅使河原さんも、何も言わない。

それぞれの呼吸の音だけが、耳障りな、しんとした空間。

ずっと、空気が動いた。

慌てて振り向くと、入り口のドアが閉じるところだった。見回すまでもなくわかる。音もなく、勅使河原さんが移動したのだ。ドアを閉める風圧だけが此方にやってきて、気が付けば姿かたちもない。彼らしい。

気を使った、というところだろうか。

向き直れば、ふっと。

此方を見つめていた木崎さんの目が、和らいだ気がした。

「これしき、乗り越えんで魔王に等なろうと思うものか」

「……自信過剰」

「フン」

少しだけ笑う顔が、珍しく此方の不安を思いやつの事だと思つと、普段気が回るとは思えない木崎さんがそんな事をするなんて、自分はそれほど思いつめた顔をしたかと、此方も笑わなくては、と思つ反面、頬の筋肉が強張つていて、今はどんな顔をして微妙な気がした。

でも、これだけはわかる。

どうしたところで。

木崎さんは、此方の世界の頂点である魔王になろうとしている。ならば。

彼にとつては、現在の状況は、向き合うべきもので、勝たなくてはならない。危ないからつて、逃げようなんて気はさらさらないし、例えば現在回避したところで、彼が進んでいく道を思えば、この先も。

何処かで、起きるであろう事柄、なのだ。

嗚呼。

魔界も人間界も。

生きるつていう事は、大変なんだ。

(2011/9/26)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1095r/>

ふぁんたじい

2011年10月8日19時14分発行